

恋愛とは何ですか



著&撮：12号電探

コートでくつろぐ彼女

9月の第4週、梅雨からのぐずついた空模様が今日もあやしい。
今年はずいに夏がやって来なかった。

2日前に発熱した夏風邪は3回目の解熱剤投与で収まり、熱いシャワーとカップ3杯のCOFFEEが、出かける前の気分を楽にさせてくれる。

ツーリング用のタンクバックにテニス用具とツナギになったレインウエアを詰め込み、タンデム用のフルフェイスをリアシートへ固定する。

ガソリンコックのレバーをONのポジションまで回し、キックペダルをゆっくりと踏み下ろす。スターターノブは引かない。

暖かい季節の2ストロークエンジンは、チョーク機構を作動させない方が始動が容易になる。アクセレーションはキックペダルの工程に合わせず、タイムラグをもたせながら全閉から1/2まで開く。

サイレンサーに蓄積されたカーボンをトーチで焼き落としたばかりのチャンバーは、以前に比較して太めのエクゾーストノットを聞かせ、回転計の針は吹け上がりが改善されたことを示してくれる。

風に舞った雨滴が不定期にシールドへ落ち、僕を憂鬱にさせる。

鎌倉街道が16号と合流する交差点から裏道へ入り、京急のガードを2度くぐって桜木町へ出る。

駅前の中州に建てられたビルを1周し、歩道へ乗り上げて止める。

両サイドを6車線の道路に挟まれた中州は、1度に2つの横断歩道を渡ろうとする人達で周期的に混雑している。

JRに併設された私鉄の高架ホームへ、折り返し運転となるステンレスボディの急行が入り、改札口を出た彼女が小走りに中州へ渡って来る。

スポーツをするときに見せてくれる彼女特有の化粧が、今日もとてもよく似合っている。

16号をタンデムで南下し、久里浜へ向かう。

杉田を通過する頃から再び落ち始めた雨粒が、金沢文庫の手前で本降りに変わる。

国道沿いに、広い植え込みを持ったパーキングを見つける。

ショックを避けるために段差をなくした部分から歩道へ乗り入れ、しばらくそのまま走り続ける。

植え込みの中央部にオートバイを停止させ、ブルーのレインウエアを取り出して彼女へ渡す。

彼女はライダー用のレインウエアを着るのは初めてらしく、ファスナーの部分に手こずっている。

表層部のベルクロテープを1度襟元から剥し、中間層のフラップを整えてから止めてやると、3重構造に作られた防水機構が雨の浸入を防いでくれる。

彼女がしきりに感心している。

僕は同色のブーツカバーだけを着ける。

雨は局地的なものらしく、横須賀方面の空はとても明るい。

途中で昼食を取り、ほぼ約束の時間にコートへ到着した。

雨は市街に入る前にやみ、コートには薄日が射している。

インストラクター役のアコードに乗る彼も含め、3人で1面を使用し、練習を開始する。

4年ぶりに振るラケットは、ボールに目がついていかないせいか、なかなかスイートスポットに当たらない。

彼女は僕より少し出来る程度で、インストラクター役の彼も僕達2人を相手はかなり手こずっているようだが、1時間もするとストロークの続く確率が急に上昇する。

風邪が完治していないせいか関節がだるく、15分に1回は休憩を取る。

ベンチに腰掛けていた僕の前へ彼女が立ち、テニスシューズを片方脱ぐ。

穏やかに足をシューズの上へ乗せる彼女を見ていると、僕は1週間前の出来事を思い出した。

退社後にJRのホームで電車を待っていた彼女は、僕の隣で右足の靴を脱ぎ、爪先で器用に靴を整えるとその上に足を置いた。

驚いた僕が何をしているのかと尋ねると、「くつろいでいる」と彼女が答えた。

僕は自分にストックしている言葉ではとても形容出来ない、彼女に対する素敵な感覚でいっぱいになり、その場ではただ微笑んで見ていた。

テニスコートの上には青空が広がり、セスナが1機通過する。

僕は”バリバリバリ”とアソウルライフルを口真似してセスナを攻撃する。

彼女は僕の無駄口に対応せず、青空に吸い込まれていくセスナを見ている。

今またコートでくつろいでいる姿に、僕は彼女が大好きだという事を確認した。

夏への扉

駅の改札を出て約30分を経過していた。
市内の中央駅からわずか2駅しか離れていないにもかかわらず、駅前のロータリーはのどかな雰囲気ではない。
午後2時過ぎのけだるい感じが、吸い込む空気にさえとけ込んでいた。
車で迎えに来てくれるはずの彼女は、まだ到着しない。

券売の窓口を通り過ぎ、缶飲料の自動販売機まで歩く。
コインを1枚入れ、コーラのボタンを押した。
午後の静けさに缶の落ちる音が響き渡り、思わず辺りを見回してしまった。
駅舎から張り出した軒の下で、先ほどから人待ち顔でたたずむ女性がくすりと笑い、こちらを見ないふりをしている。
ブルーのワンピースに白い帽子が、清楚な感じを醸し出している。
コーラを取り出し、プルリングを引く。
グリーンのに赤文字のロゴが、とてもセンスよく映えている。
缶に占めるカラーバランスも影響しているのだろう。
底に貼られたシールを見ると、原産国はカナダになっていた。
僕はコーラを飲みながら、ロータリーを一周することにした。

背もたれの壊れたベンチとコンクリート製の重石が付いたバス停が、ロータリーに沿った歩道上へ設置されている。
バスを待つ人は誰もいない。
時刻表を覗き込む。
行き先は1系統だが、途中止まりが2カ所。
朝夕を除くと、時間当たり1.5本だ。
ベンチへ腰掛け、コーラを一口だけ飲む。
甘さは適度に抑えられているが、炭酸の力が弱い。
改札口へ向いていた彼女が、柱のこちら側へ回り、空を見上げている。
ベンチを立ち、散策を続ける。
ビデオとCDのレンタルショップは、まだクローズしたままだ。
ここの住人は夜型なのだろう、営業時間は15:00~3:00となっていた。
ぽつんと目立つ、木造2階建ての布団屋がある。
ガラス製のショーウィンドウには、名前もわからない花が散りばめられたごく一般的な布団が積み上げられ、透明のビニールを被った枕が吊り下げられている。
枕カバーのほとんどは、子供向けTV番組のヒーロー達が悪役と戦っていた。
布団屋の隣は、フローリスト・ショップだ。
店頭の隅に、スチール製のスタンドに乗った赤電話がたたずんでいる。
パスケースを取り出し、赤電話まで歩く。
電話番号を確認し、ジーンズのポケットから硬貨を3枚取り出す。
コーラの缶を電話帳の棚へ置き、ダイヤルを回す。

呼び出し音が続き、6回目のコールで接続される。

2, 3秒の沈黙があり、留守番電話が彼女のメッセージを伝え始める。

ハンドセットを戻し、落ちてきた硬貨をポケットへ入れる。

電話のスタンドから店の反対側までは、バケツに入れられた花が並んでいた。

僕は淡くて薄いピンクのバラを1本抜き取った。

バケツに下げられた価格表は、100円硬貨3枚でお釣りがあることを示していた。

バラは3分の1ほど葉を落とし、茎はアルミホイルで包んでもう。

僕は散策を終えて、改札の前まで戻った。

約15分を経過していた。

電車が到着し、3人の降客が出て来る。

彼女が時刻表まで歩き、次の電車を確認している。

あと15分待たないと、電車が来ない事を僕は知っている。

僕は改札の側のメッセージ・ボードまで歩き、伝言を記入した。

”今日の箱根の夕焼けは、残念ながら締め切りました”

書き終わるとポケットのバンダナでチョークの汚れを落とし、彼女の所まで歩いた。

「来ないようですね」

「ええ」

彼女の表情に訝しげな様子はなく、素直な返事が帰ってきた。

僕はちょっぴり勇気づけられ、

「これ、あげます」

と言った。

「私に」

「はい」

「よろしいのかしら」

僕が花を差し出すと、彼女は嬉しそうに受け取った。

彼女が黒いポシェットから飴を取り出し、僕に差し出す。

「どうぞ」

「ありがとう」

飴は、アセロラの味がした。

「僕は待ちくたびれたので、帰ります」

と言うと、にっこり笑って僕の握っているコーラの缶を見つめ、

「素敵な色ね」

と、言った。

頬にひろがるそばかすが、笑った表情に屈託のなさを増幅する。

ロータリーへバスが入って来る。

僕は電車をやめて、バスで繁華街まで出ることにした。

「じゃ、さようなら」

「お花を有難う」

僕は歩きながら最後の一口を飲み、空缶をくずかごへ入れた。

アセロラとコーラの微妙な味がした。

バスへ乗り込み、一番奥のシートへ座ると窓を開けた。

バスが発車し、ロータリーを大きく回る。

僕が彼女へ手を振ると、バラの香りを嗅ぎながら、もう一方の手を振って返してくれる。

日陰にいる彼女とロータリーの照り返しが、思った以上に強いコントラストを作り、夏への扉が開いていることを教えてくれた。

ハロウィンは魔女とタンDEM

1

僕の大切な女性が結婚することになった。
僕は当然のような雰囲気をまわりに作っておき、お別れ会を企画した。
一度は仮装パーティーを仲間内で開催したいと思っていた僕は、季節柄うまくハロウィンに同調して貸切り専用のBARを1軒予約した。
横浜を舞台にしたTV番組でも使われるとても素敵なBARだった。
本来のハロウィンは10月31日の夜に行われる。
仮装パーティーは彼女と僕の共通の友人をスタッフに、30人近いメンバーが趣向を凝らして集まることになった。

僕の左隣で、てきぱきと仕事を片付けている麻子さんに声をかけた。
「お別れ会は、仮装にしよう」
退職に備えて引継の資料を作成していた彼女は、僕と斜めに向き合って膝を揃えはにかんだ表情で僕に尋ねた。
「わかった、仮面ライダーをやるのでしょうか」
僕は第2案として考えていた仮装ネタを当てられ、彼女のデスクの上にあったキャンディーポットから飴を一つ取り出し、口へ放り込んだ。
「いや、違うよ。何か銃を持つ格好をしようと思っている。君は何をやるんだい」
「まだ決めてないわ」
「中国人の格好をするなら、カンフーの練習着を貸してあげよう」
彼女は以前一緒に写真を撮りに行ったときに僕が着ていた、ブルーの中国服を思い出した。
「あのときの服でしょう」
「Sサイズの、まだ袖を通していないものも1枚持っているんだ。髪をそれらしくして、靴を選べば十分だろう。よかったらやるよ」
と、僕は言った。
彼女は僕の提案に、明日休暇を取った用件を済ませてから渋谷へ寄り、これといったものが見つからなかったら電話をすると返事を保留した。

2

スタッフと買い出しに出かけた僕は、ファンシーショップのハロウィンコーナーへ入った。
かぼちゃをメインとした各種キャラクターグッズの中からほうきに乗った魔女のキャンディーを見つけ、素敵なアイデアを思い付いた。
僕はそのキャンディーと魔女をかぼちゃに置き換えたもう1本のキャンディーも買った。

職場には、香さんという麻子さんも僕も共通に親しい女性がいる。
今回の仮装パーティーにも、当然出席をお願いしていた。
香さんはどこかモンゴロイドを感じさせない、コーカソイドと中間的な雰囲気を備えている。

僕は、彼女の写真も撮らせてもらったことがある。

落ち着いてしまったときの表情は彼女特有の大ざっぱな感じを認めるが、緊張気味の笑顔は麻子さんと同じような内面的なシンメトリックがあり、もともと美しい彼女をいっそう際立たせる。
僕はマイフェイバリットフォトグラフとして、数枚の作品を永久保存している。

職場はかなり広い敷地を持ち、社内を移動する場合は自転車を利用する人が多い。
1年程前他部門から帰って来る僕は、JRの引き込み線脇に設置された道路上で、自転車に乗る彼女とすれ違った。
黄昏時、逆光線のシルエットで見えていた彼女が順光線に切り替わり、僕はほうぎに乗った魔女を見た。
それ以来、僕はトワイライトゾーンを確信している。

麻子さんにかぼちゃのキャンディーをプレゼントし、もう1本を持って同じフロアの香さんの所へ行った。

僕はキャンディーの入った紙包を後ろに隠し彼女に尋ねた。

「いま、忙しい？」

「なあに」

「ちょっと応接室までいいかな」

彼女は仕事を中断し、僕の後を来客用の応接室へ入って来た。

彼女とテーブルを挟んで差向いに座り、魔女のキャンディーを差し出した。

「はい」

「あら」

と、彼女は答えた。

事前にスタッフを通じて彼女の耳に届くようにしていたおかげで、彼女はキャンディーの意味をすぐに理解してくれた。

「やってくれる」

「いいわよ、でも帽子が大変ね」

「黒い服はあるかい」

「あるけど、それらしくないのよ」

彼女は僕が帽子を準備することで、魔女になることを了解してくれた。

また、当日重なってしまった別の宴会を途中で切り上げるために、僕がオートバイで迎えに行くことになった。

3

僕はスタッフに事前準備を任せ、オートバイを用意するために一度帰宅した。

僕の仮装は、スワットに決定していた。

仮装のための小道具は、麻子さんとエレシヨールを見学したついでに、上野へ出て揃えていた。

オートバイ用の革パンツの上に、ブルゾンを着込む。

装備はブーツを含めすべて黒で統一した。

Y型サスペンダーを取り付けたピストルベルトを腰に巻く。

サスペンダーとベルトには、マガジンポーチ、サイドアームホルスター、L型ライト、コンパ

スポーチをオプションで装備している。

ショルダーベルトを用いて、M16A1を背中に固定する。

マガジンポーチには、ガスボンベと精密研磨BB弾を入れる。

カラデザインのサングラスをかけ、ベレー帽をかぶる。

我ながら少しさまになっているのは、銃器関係の専門誌を定期的に見ているからだろうか、と鏡を見ながら思った。

ベレー帽をフルフェイスに取り替え、僕はオートバイでマンションのパーキングから出た。信号に止められると、後ろについたドライバーが皆げげんそうな顔をしているのをミラーで確認出来る。

4

予約したBARは運河を跨ぐ橋を隔てて、米軍施設と隣合っていた。

”ポールスター”。

昔は米兵で賑わっていたそうだが、一度売りに出され隣の”スターダスト”のオーナーが買い取っている。

橋の入口には、日本国政府のコーション文が書かれたバリケードが並べられている。

時折MPのパトロールカーがバリケードの前まで来て、引き返して行く。

パーティーはスタッフの1人が道に迷い、定刻より1時間近く遅れて始まった。

僕は乾杯もそこそこに、香さんを迎えに出た。

彼女との約束の場所には5分程早く着き、歩道に乗り上げて停止させた。

僕はオートバイのシートを外し、リアショックユニットのプリロードを最強から2番目のポジションへ合わせた。

横羽線のランプから合流する交差点は、金曜の夜らしく、とても込み合っていた。

横断歩道の方向へ曲げていたミラーの中に、彼女が駆けて来る姿を見つけた。

「待った」

と、彼女が尋ねた。

「定刻だよ」

と答え、彼女のバックを肩からクロスするように掛けてもらった。

彼女にフルフェイスを渡し、顎ひもを固定してやる。

メインキーとキルスイッチをONに回し、タンデム用のステップをブーツのかかとで倒した。エンジンを始動し、キュロットの彼女がタンデムシートへ座ったのを確認して、ゆっくりとスタートした。

タンデムのコツを教えないと、彼女がどのような反応を示すか試してみた。

徐々に速度を上げ、法定速度+ α で車の流れに乗った。

先ず彼女は僕の腰に両手をまわして、加速を受け止めた。

バランスは崩れない。

タンデムの経験が幾度かある、もしくはライディングそのものをこなしている印象を受けた。

赤信号に減速する。

彼女のフルフェイスが、ブレーキングに同期して小刻みに僕のフルフェイスへ接触した。

ただし重心のずれはなく、バランスはよい。

タンデムの経験よりスクーターにでも乗っているのではないかと、僕を確信させた。減速時に問題があると感じた彼女は、片腕を僕の腰に残すともう一方でリアのグラブバーを掴んだ。

僕はあまりの適応力に驚き、最近のオートバイが前傾姿勢を強要して昔のような乗り方が出来なくなったことを、彼女に説明する必要をなくしてしまった。

僕達は、所要時間12分のタンデム走行を終わり、“ポールスター”へ入った。

5

パーティーは、ピンクのブタのパーツを着けた麻子さんが仮装コンテストの大賞を取り、とてもよい雰囲気でもエンディングを迎えた。

“ポールスター”は、JRの駅まで歩いて20分近くかかる。

22時を過ぎ、希望者を順に2台の車で駅まで送る。

スタッフと数人のメンバーが残った。

BARの借用時間が終了近くなって、COFFEEをいれた。

魔女の仮装から着替えた香さんが、カウンターの中へ入りCOFFEEのサービスをした。

心地よい疲れと残ったメンバーとの会話が、COFFEEをととても美味しくさせてくれた。

オーナーへキーを返し、アコードに乗るスタッフが麻子さんとその友人を私鉄の駅まで送るために出発した。

香さんと僕が、最後に残った。

彼女の希望で僕が自宅まで送ることになっている。

エンジンを始動しギアをローへ落とした僕は、背後の運河に向かって後方確認を行った。

彼女を乗せゆっくりとクラッチをつないでスタートしようとしたが、冷えきったエンジンがアクセルにうまく反応しない。

ギアをニュートラルへ入れ、軽くレーシングする。

僕は跳ね上がったタコメーターの針が徐々に戻るのを見ながら、魔女とタンデムすれば空を飛べるのではないかと思った。

涙ほのかに

神奈川の地方駅で待ち合わせた2人は、彼のオートバイでタンDEMツーリングを楽しみ、真鶴で休憩していた。

テーブルには、彼女の注文したトロピカル・クリーム・ソーダと彼のライム・ソーダが並んでいた。

「腕はどうだい」

敏夫は、洋子の日焼けを心配して聞いてみた。

「大丈夫よ」

「ほんとだ」

洋子は夏になって1度だけプールで泳いでいたが、彼女の腕はまだ泳いでいない敏夫より白かった。

8月の第3土曜日、敏夫は高校最後の夏休みを有意義に過ごすため、今日は洋子を誘ってツーリングに出かけていた。

店内はピアノが置かれた大きなフロア、2人が座っているカウンターのあるフロア、そして屋外のテラスと巧みにレイアウトされていた。

旧道に沿って建てられたこの店は眺望がよく、海岸沿いを走る新道が見下ろせた。

窓際には、2つの双眼鏡が雑然と置かれていた。

おそらく店のオーナーが、客のためにサービスとして常設したものだろう。

2人が8倍の双眼鏡を見つけ、海岸を覗く。

敏夫は趣味としている銃器類の知識から、スナイパーライフルのスコープが4～7倍であることを思いだし、このような利用方法に十分な倍率であることを説明した。

壁には、パネルへ入れられた1枚の写真が掛けられていた。

競技用のトライアル車が、フロントのタイヤを上げて岩の上に静止していた。

敏夫は、店名の”サドルバック”から、このライダーが店のオーナーではないかと彼女へ教えた。

サドルバック本来の意味は、馬の鞍へ左右に振り分けるバッグのことをいう。

馬とオートバイは共通事項が多く、オートバイをアイアンホースと呼ぶ人もライダーの中には結構いる。

店を出るとパーキングへ向かった。

午前から午後へ移り変わろうとする日差しが、2人の上からシャワーのように降り注いだ。

パーキングではいま着いたばかりのカップルが、敏夫のオートバイに並べて駐車しようとしていた。

車種はスズキのGSX-250E、敏夫のオートバイより年式は新しいが、もう珍しくなってしまう2気筒の空冷エンジンを搭載している。

「あら、あんなところにユリが」

「ほんとだ、珍しいね」

洋子が指さす方向を見ると、パーキングの外れの崖っぷちには見事なユリが咲いていた。

伊東に入り駅前へ出ると、商店街の入口でオートバイを停止した。
敏夫はエンジンを切り、30m程オートバイを押して路地に駐車した。
2人は「海女屋」の暖簾をくぐった。
彼の推奨する、あわびのお粥で有名な店だ。
十分にお腹をすかせた2人は、刺身の盛り合わせにさざえと蛤、そして目的のお粥を注文した。
料理が運ばれるまでに、敏夫は先日撮影したスライドを取り出して洋子へ見せた。
「この前撮った写真だよ」
敏夫は写真部に所属していた。
彼の専門は、女性ポートレートだ。
たまに親しい女性をモデルに誘い、カメラ好きの友人達を集めては撮影会を企画する。
彼は先輩のいないこの撮影会が、気楽で大好きだった。
敏夫と洋子の付き合いも、去年に彼女を撮った頃から始まっていた。
彼が撮影する女性には、きまっていくつかの共通点がある。
丸顔かしもぶくれで、そばかすがあり、胸が大きいこと。
洋子は、そのどれにもあてはまっていた。
透過型の小型スライドビューワへ、1枚1枚差し込んで彼女へ渡した。
洋子はそれを窓側へ向け、外の明りでじっくりと観察した。
「どうしてこんなにピントが合うの」
彼女も一眼レフを持っていた。
敏夫に勧められて購入したものだ。
マニュアル露出の可能な中級機だった。
敏夫は今年になって眼鏡のレンズを作り替えたことが、ピントの正確さに大きく貢献していることを説明した。

昼食を済ませると海岸沿いのバイパスを走り、135号線をさらに南下する。
富戸から泉郷を通過し、大室山へ到着した。
2人は麓のレストハウスからリフトに乗り、頂上へ向かった。

リフトは3つ目の支柱を過ぎると突然静けさが増し、十分に観光気分を満喫させてくれた。
約4分の所要時間で頂上へ到着した。

「アーチェリーかしら」
と、洋子が質問した。
頂上は中央部が大きく窪み、いくつかのターゲットが並んでいた。
「そうなんだ、ここは休火山でこの窪みは火口だよ」
「ええっ、じゃ爆発するの」
敏夫は笑って答えなかった。
先日、近くの海底火山が噴火したばかりだった。

「一回りしようか」
洋子は、火口の反対側へまわる坂道にあまり気乗りはしなかったが、1周15分という彼の説明で歩き始めた。
敏夫はソロツーリングでここまで来ることが多く、伊東の市街で魚を食べ歩くとよく大室山で休憩していた。

晴れた日には伊豆7島のいくつかが見渡せ、彼は何時間でもここから景色を楽しむことができる。

ときおり風に乗って舞い降りる小さな雨つぶが、2人のぶらさげたヘルメットに水滴を残した。

しかし雨具を出すほどの空模様ではなかった。

「夏休みはどう？」

敏夫は、ものごとに計画的な洋子が、どのように過ごしているかを聞いてみた。

「雅弘さんの郷里に行ってみたわ」

洋子には、以前から特別に親しいボーイフレンドがいた。

同じ高校に通っていたが、敏夫はよく知らなかった。

都会生活しか経験のない彼女は、雅弘に誘われ、彼の田舎で旧盆を過ごしたばかりだった。

雅弘の家族とも親しい付き合いをしている洋子は、一家に歓迎されて招待されたようだった。

今日のツーリングは、敏夫が雅弘との間に割り込むようにして洋子を誘ったものだ。

「あの山は面白い形をしてるわ。枯山水と言うのかしら」

天城の方向に、中国の桂林を思わせる山があった。

少し曇った空模様が、水墨画に近い景色をつくりだしていた。

敏夫は、黒いツーリングバックから愛用の一眼レフを取り出し、ショートズームを装着した。

常用しているISO400のリバーサルフィルムを入れると、山を背景に洋子の写真を1枚撮らせてもらった。

フレーミングはポートレートではなく、彼の苦手な記念写真に近いものだ。

露出は被写界深度を優先し、F11まで絞り込まれていた。

さらに、遊歩道から飛び出た杭にカメラを乗せると、内蔵されたメカニカルなセルフタイマーをセットして、彼女といっしょに写った。

3世代前のニコンが、乾いたシャッター音でレリーズを切った。

大室山を下りた2人は、今は無料となった遠笠山道路を経由して伊豆スカイへ向うことにした。

敏夫のオートバイは、標高が上がりつつあるせいか常用回転域でプラグが被り気味になり、エンジンの吹き上がりが悪くなった。

2ストロークエンジンは、元々キャブレターのジェットイングに神経質だが、特に気圧の変化に影響されやすい。

トランスミッションも、3速が上り勾配に適していなかった。

彼は、意識的に2速を多用してプラグが焼けるのを待ち、グリップのよい路面の助けも借りて、軽快なワインディング走行へ切り換えた。

洋子が路面に膝を擦りそうだと訴えたが、クリッピングポイントでまだ20cm以上の余裕があった。

伊豆スカイへ入ると、敏夫は料金所で熱海峠までの支払いを済ませ、高速でコーナーをクリアする走りへ変えた。

サードギアで7000rpmを保つと、時速は110km/hに達した。

距離計が3万kmを超える彼のオートバイは、よくメンテナンスされてはいたが、リアショックのサスペンションがへたりつつあった。

120km/h近くで高速コーナーをまわると、ボトムングはしないものの、サスペンションが踏ん張りきれなくなり、スイングアームがよれそうになった。

オートバイが“限界だよ”と教えてくれる。

これ以上の荷重をかけると、ハイグリップタイヤは一気にテールスライドを始めガードレールへ張り付く結果を招く。

敏夫はこの限界のサインに従い、コーナーの手前で十分にブレーキングを完了する、スローイン・ファーストアウトの走行に切り換えた。

玄岳を過ぎると、澄み切った空にパラグライダーが遊泳していた。

道路際に設けられた展望台へオートバイを乗入れ、2人は空の散歩に見とれながら休息を取った。

常時旋回を必要とするハングライダーに比べ、静止可能なパラグライダーはとても気持ち良さそうだった。

「綺麗、どうして静止出来るのかしら」

「谷からの吹き上げと重力が丁度バランスしているんじゃないかな」

彼はオートバイへ戻り、タンクの上に取り付けたバックからカメラを取り出した。

少し時間をかけて、2枚の写真を撮った。

パラグライダーのカラフルな背景が、縦位置と横位置で彼女と一緒に収まった。

熱海の市街を抜ける頃から、洋子の重心がふらつき始めた。

「休憩しようか」

「まだ大丈夫よ」

敏夫はこのような状況で、彼女が遠慮してなかなか本音を言わないことをよく知っていた。

赤信号に止められ、彼がリストウオッチを確認した。

夕食の予約時間に30分程遅れそうだった。

この後2人は横浜へ戻り、友人達と食事をする約束をしていた。

敏夫は率直に洋子へ伝えた。

「約束の時間には少し遅れるよ、いいかな」

「ゆっくり行きましょう」

敏夫は出来るだけ自動車専用道を利用し、時間を短縮するルートを取った。

大磯の市営パーキングへ入ると、約束の店へ連絡をとることにした。

洋子が、横浜の104へ店の電話番号を問い合わせた。

オペレーターがコンピューターに切り替わり、ハンドセットから流れる数字を彼女が復唱した。

忘れないように、彼も繰り返して復唱した。

店のオーナーに友人達への伝言を頼むと、10分ほど休んだ。

缶入りのコーラを飲んだ時間であったが、タンデムの疲れが嘘のように消えた。

パーキングの管理者が、ハンドスピーカーで利用時刻の終了を案内し始めた。

以前はここも無制限に利用できたが、暴走族対策のために意外なほど早い終了時刻を設定していた。

2人は平塚、茅ヶ崎を過ぎ、浜須賀の交差点から134号を抜けた。

敏夫だけなら辻堂駅を經由して藤沢バイパスを走行するが、神奈川県内の自動車専用道は、自動二輪のタンデムを禁止している。

彼は、藤沢市街を通過し原宿へ出るルートを選択した。

警察署を過ぎてJRの高架を越えると、赤信号に減速した。

ギアを落とし、スロットルを煽るとエンジンの回転数を同調させた。

突然、渋滞で停止している車のドアが開いた。

敏夫の右手中指が、辛うじてブレーキレバーに掛かる。

しかしレバーを引く間もなく、フロントからドアヘクラッシュしていった。

オートバイは右ウインカー、ヘッドライトステーを折り曲げ、タンクをへこませながら衝撃を吸収した。

彼は停止したオートバイを支えようとしていたが、右腕の痛みには耐えかねて歩道側へ倒れた。

支えきれなくなったハンドルを放し、左後方を見ると、歩道上へうまく転がる洋子を確認できた。

敏夫はオートバイに挟まれた左足を抜くと、そのまま仰向けになって空を見上げた。

ヘルメットのバイザーが、ショックで半分上がっていた。

起き上がった洋子が彼のヘルメットを取り去った。

誰かが救急車を手配する声が敏夫にも聞こえた。

「大丈夫？」

洋子が動揺している様相で呼び掛けた。

「大丈夫だよ、君はどうだい」

「うん、平気」

敏夫は、心臓に遠い部所から手足を順に動かしてみた。

特に骨折している様子は感じられなかった。

洋子が、彼の右腕の負傷に驚いて息を呑んだ。

ドアに削られたらしい傷が白い脂肪を見せ、骨と勘違いしたようだった。

救急車のサイレンが近づいてきた。

のぞき込む洋子の表情が泣き顔に近くなる。

敏夫はナットコールのバラードで、THEY CAN'T MAKE HER CRY を思い出した。

邦題は”涙ほのかに”だったと思ったが、自信がなかった。

敏夫は彼女の半ベそを楽しみながら、暫くのあいだ痛みを忘れることができた。

君にそっと教えよう II

辻堂駅そばの踏切は、1日に何度か開かずの踏切になる。
上りと下りが絡み合い、列車を3本待たされるケースも何度か経験した。
踏切をぬけると、商店街を歩いて海岸へ向かう。
この道は、後半からポツポツとサーファーショップが並び、なかにはクィーンマリーのようなフランス料理を出す、少し知名度の高いレストランもある。
辻堂海浜公園の手前で右折し、134号線と合流する県道へ入る。
ちょうど浜須賀までの中間あたりで、木造2階建ての側面に黄色いペンキで大きく店名をディスプレイした、ガレージショップを確認できる。
店内の雰囲気は、きわめて駄菓子屋的だ。
片岡義男の本によると、アメリカで日本の駄菓子屋に相当するのはドラッグストアらしい。
と言っても僕が彼の本を理解する限り、ドラッグストアはコンビニエンスストアに近いようだ。

店に入り、数々のアメリカングッズやソックスにいたるまでの商品を見ていると、とても楽しくて途中でやめることができない。
また1, 2度覗いたくらいでは、希望のものだけを買ってすぐに店を出るようなまねもできない。
でも、僕はまだ1品も購入したことがない。
魅力的な商品はあるのだが、コストパフォーマンスに納得できないだけの理由だ。
例えば、日本人にはただの白いアンダーウェアに見えてしまう、“ヘインズ”のTシャツも並べている。
市価としてはあたりまえのプライスが付いている。
近くのジーンズショップでは、セールで30%OFFまで下がる。
他の商品も、同様な価格付けと判断する。
だが、僕のこの考え方は、自分でも誤っていると思う。

子供の頃に駄菓子屋へ行って、コストパフォーマンスなんて考えていただろうか。
たしかに遠足の時などはスーパーマーケットへ行き、学校の指示する限度額いっぱいにおやつを買っていた。
でもそれは、駄菓子屋の楽しみ方とは次元の異なるものだ。
少ない小遣いで十分に買える、いわば子供をワクワクさせてくれる3流商品を、いかに楽しんで買っていたかは、かつて誰でも経験したことだ。
特に店へ入る前には、今日はこれだけ使うぞと心に決めていた。
月にいくらの小遣いだったかはもう思い出せないが、面白いものがなければまた来るというようなことを僕はやらなかった。

数千円を握りしめてこの店に行ったとしよう。
きっと30分から1時間近くかけ、アメリカングッズをセレクトするに違いない。
しばらくの間、このような楽しみ方を忘れてしまっていたようだ。
言い替えるならば、視点を変えることによって楽しみ方を増やす、1つの手法を思い出してしま

った。

購入したものは、書斎のインターメーベルヘディスプレイされ、いつの間にか何処かへ行ってしまいうに違いない。

次の休みは、ガレージショップへ行かないか。

オートバイの後ろに乗付けてやるよ。

こんな事に興味を持つのは、君も僕も同じさ、きっと。

素敵な正三角形の中心

石川町で電車を降りると元町方面の出口へ向かう。
5月の第1週、天気予報は午後のにわか雨を予報していたが、今はとても風が強く、快晴だ。
先に到着していた、下り線が発車する。
向こうの降客と合流しないように、少し時間をかけてホームを歩く。
約束の時間には3分ほど遅れていた。

改札を出る直前に、時刻表の前で待つ香さんを見つける。
以前にここで待ち合わせをしたときと同じ位置だ。
とても彼女らしいと思う。

構内は開港記念日のせいか、とても込み合っていた。
改札を出た僕は、彼女の視界の中で僕が歩く姿をパターンとして認識出来るように、一度正面へ回り込んでからゆっくりと近づく。
彼女の端正な表情が、穏やかな笑顔に変わる。
「やあ！」
「こんにちわ、おひさしぶりですね」
僕達は約3カ月振りの挨拶をかわし、元町を海側へ向かった。
今日は僕の誕生日、彼女がランチを御馳走してくれる約束になっている。

"霧笛楼"は1階が半分程地下に潜るおもしろい構造をしている。
ディナーは2階部分より上の座敷がメインになり、和食器に飾り付けられたフランス料理が店の特徴になっている。
ランチタイムは1階部分のみが使用され、テーブル席とカウンターでサービスされる。
僕達は窓際のテーブルへ案内された。
インテリアはダークブラウンにまとめられ、彼女の背景には、横浜をイメージ化したステンドグラスが取り付けられていた。
透過した光線は、意外にもニュートラルなカラーで、彼女を浮き立たせていた。
ラインライトに輝く彼女を前にして、素敵な店、素敵な料理、素敵な相手と素敵な正三角形の中心にいる自分を十分に意識した。

ウェイターがオーダーの確認に来る。
僕達は、メインディッシュを小羊のステーキにして、赤ワインを選択した。
久しぶりの赤だ。
料理を待つ間に、彼女からプレゼントを渡される。
1枚のスケッチとメタル製のペーパーウエイトがカードと一緒に入っていた。
スケッチは、以前に僕が頼んだものだ。
彼女と"風我亭"で食事をしたときに、花を描くのが得意だと聞いて、1枚欲しいと言った事がある。
スケッチには、"風我亭"のオーナーが予約客の女性にプレゼントするバラが描かれていた。
帰宅後に、夜遅く描いたと説明してくれる。

1輪のバラを、全体と花の部分に分割して構成していた。
先ずVIEWを1輪として描いた後、最も見栄えのよい別VIEWから花だけを独立させていた。
かなり構図に苦労した形跡が窺える。

ペーパーウエイトはメタル製で、動物の尻をディフォルメしていた。
僕はペーパーウエイトを使用する機会が、かって一度もなかった。
身近なのに遠かった物を所有するチャンスにめぐまれ、彼女がもたらしてくれた嬉しさに少し戸惑った。
尻の選択理由を聞いてみると、そのシリーズの中で1番デザインが気に入ったと教えてくれる。
僕はこのペーパーウエイトをダイニングのテーブルへ乗せ、タングステンライトの下で写真に撮りたくなった。
テーブルはビクターのクラフトシリーズを使用している。
色は黒だ。
何度かこのテーブル上でブツ撮りをやってみたが、アンチモニーに銀メッキされたこの尻は、今までにない技法を要求されると思った。

約3カ月ぶりの会話は、僕が中心に話してしまい、彼女が聞き手にまわった。
いつもとは逆だ。
彼女が、オードブルに出されたテリーヌの材料を、僕に質問した。
彼女と食事をすると、1度はこのような楽しい状況になる。
メニューをしっかりと聞いていなかった僕は、少し大きめにカットして、ゆっくりと味わった。
「豚だろう」
と、推測する。
「そうかしら」
と、彼女が言った。
少し疑問があるような表情だ。
確かに、フランス料理で豚のテリーヌは少しおかしいかなという気持ちも拭いきれず、入口にディスプレイされたスタンドメニューを思い出して、帰りに確認することにした。

デザートにケーキとシャーベットが出され、COFFEEをゆっくりと楽しみながらこれからの予定を相談した。
僕は山手に住む共通の友人へ電話して、突然訪問することを提案してみた。
彼女は、大賛成だった。
もしその友人が居なければ、県立博物館へ行ってフェアブル展を見る、第2の案も成立した。

"霧笛楼"を出て、表のメニュースタンドを確認する。
テリーヌはハムで作られており僕達は虚をつかれた思いで感心した。
公衆電話を捜しながら元町商店街を歩く。
この通りに限らず街頭から公衆電話が少なくなった。
一般家庭の普及率向上と、公衆電話にかかるメンテナンスの人権費節約からNTTは設置台数を削減しているらしい。
彼女の記憶を頼りに、元町プラザの2階で捜し当てる。

友人宅へかけると妻である美恵さんが出て、近所に出かけているがすぐに戻ると教えてくれる。訪問の是非を訊ねると、快く了承してくれた。

僕達はどこかで COFFEE を飲み、彼が帰宅する頃に訪問することにした。

石川町には、鎌倉の風情を思わせる陶芸茶房がある。
マスターは髭を蓄え、いつもダークスーツをきめている。

ほかに従業員はいない。

店の特徴は、マスター自ら挽く炭焼き COFFEE を、湧水で抽出してくれることだ。

器もずいぶん凝っている。

有田、伊万里、美濃、萩、備前などのカップがカウンターに並び、客が指定することも可能だ。見方を変えるとこの取り合わせは節操がない。

しかし店内は、ギャラリーを兼ねた全国の骨董的名品がディスプレイされ、小売も行なわれている。

陶芸に若干うるさいミニ文化人が多いこの時勢では、仕方がないのかもしれない。

僕達は、テーブル席のせいかカップが選べず、少し残念な気持ちが残った。

彼女は、備前が好きらしい。

僕は自分の干支である、備前の大きな羊を持っている。

鉄錆のような落ち着いた備前も好きだが、食器としては優しい萩の方を好む。

彼女と陶芸の話で1時間近くを過ごし、店を出た。

山側の裏道を駅へ向かうと、表通りの喧騒が嘘のようだ。

山手で下車し、西側の丘へ上がる。

約10分で、友人のアパートへ到着した。

美恵さんが出て、彼の帰宅が少し遅れる旨を確認したと伝えてくれる。

外出先へ電話を入れてくれたらしい。

僕達は上がって待つことにした。

彼女は、美恵さんとも面識がある。

3人で雑談をしていると、彼が帰宅した。

「ほお、二人で来ると電話で聞いたので、誰かと思いましたよ」

と、彼は意外な来客に少し驚いた様子だった。

取り留めのない話をしているうちに、予報通りの夕立になった。

雷を伴ったにわか雨はなかなかやまず予想以上に僕達の足を引き留めた。

まだ傘を必要とする状態であったが、突然の来訪を詫びて彼の家を退散する。

彼女と付近の環境の良さに感心しながら歩く。

本来の山手から若干外れるが、根岸へ通じるこちらの丘も高級住宅街だ。

中央部が階段になったコンクリートのスロープを駅へと下る。

雨上がり独特の匂いが、辺りにとけ込んでいる。

僕は今年のバースデイを、決して忘れる事がないと思った。

彼女から貰った素敵なプレゼントもそうだが、この雨上がりの匂いが、きっといつかどこかで、”ふっ”と二人で歩いた事を思い出させてくれるに違いない。

揺れるハイカット

ライディングブーツは、GOTO製を使用している。
メーカーのロゴも入らないブラック一色を、苦労して捜した。
上野のバイク街も含めて10件近くのショップを回ったが、次回に購入するときは、残念ながらもう製造していないだろう。

日常の靴は、コンバースのオールスター・ハイカットを愛用している。
休日の午後、ショートツーリングに使用する事もある。
色は、グレーもしくはブラックが好きだ。
僕が少年時代、バイクキッズの靴はハイカットと相場が決まっていた。
転倒時にくるぶしをガードする目的もあったが、膝を曲げたライディングスタイルに、ハイカットはとてもよく似合っていた。
当時はバスケットシューズの略称でバッシュと呼ばれ、最高峰はコンバースだった。
僕も含めてバイクキッズ達は、“もどき”しか履けなかったと覚えている。
現在は円高の影響もあり、ディスカウントストアで安く手に入る。
物価上昇を考慮すると、信じられない程手軽に購入出来るようになってしまった。
今になって、重くかつ内布の剥がれやすいコンバースを愛用しているのは、当時の憧れ以外に理由は見あたらない。

五月晴れのあざやかな日曜日、鎌倉の材木座にオートバイを停める。
海へ入るために、コンバースを脱ぐ。
中へソックスを詰め込むと左右の解いた紐を結び合わせ、ハンドルグリップへ掛ける。
波打ち際までゆっくりと歩く。
後ろを振り返ると、浜風に揺れるハイカットが、「休日だね」と僕に言っている。

砂時計はいつのまにか閉店

入社11年目、僕は初めて午後の半休を取得した。
休暇カードの理由欄には私用とだけ記入した。
午後半休は、12時を過ぎると退社の権利が発生する。
僕は彼女との待ち合わせ時間を逆算し、いくつかの所用を加味して15時過ぎに着替えを済ませた。
11月の第3週、今日はとても暖かい。

JRで横浜へ出た僕は、銀行へ寄ってから1駅手前の東神奈川へ戻った。
逆算に余裕を取りすぎ、午後のひとときをお気に入りのCOFFEEショップへ入って雑文を書いた。
友人や同僚がまだ仕事をこなしているこの時間に、ペンを走らせながら飲むCOFFEEは、とても贅沢な気分させてくれた。

駅の北側には大手スーパーマーケットが2店あり、どちらも駅からの陸橋で接続されている。
COFFEEショップを出た僕は、近い方の店内へ入り、1階のフロアを通過した。
ビルの反対側には、フラワーショップがある。
たくさんのバラの中から淡いピンク色を時間をかけて選択し、花束を注文した。
ショップのお姉さんが、僕に尋ねた。
「プレゼントですね」
僕は半分返事に困って、ほんのり赤い小さな嘘をついた。
「彼女のお誕生日です、リボンを付けて下さい」
お姉さんはサービスでかすみそうを入れ、ほぼ想像したとおりの花束を作ってくれた。

再び横浜へ出た僕は、ブックストアとスカイビルの輸入雑貨専門道を覗き、マリンシャトルの待合室へ入った。
約束の時間までに、まだ25分もある。
ベンチシートへ腰掛け、“ケニー・G”を聴きながら彼女を待った。
シャトルが2便出港した。
乗船客は少なく、8割がカップルで、残りはものめずらしさにやってきたグループのようだ。

約束の時間に少し遅れて彼女が入ってきた。
「待ちました」
と、彼女が尋ねた。
今日は、横浜駅からの連絡通路となっているデパートが定休日、待合室までの迂回路に迷ったようだ。
僕は、彼女に花束を渡した。
「はい」
「ありがとうございます」
「おぬしに花をプレゼントするのは初めてなのに、最初で最後になってしまったね」

と、僕が言うと、

「いいえ。2度目ですよ」

と、彼女が訂正した。

僕は、最初だと思い込んでしまっていた。

最初は彼女が風邪をこじらせ、1週間もお休みしたときだった。

僕は社用で外出し、仕事を終わると彼女のマンションまで行った。

マンションは都内の静かな住宅街にある。

僕は私鉄駅前で切花のバスケットを購入し、突然電話をかけて来訪した。

彼女と彼女のお母さんが、とても喜んでくれたのを思い出した。

きっと僕は、お見舞いの花は同じプレゼントであってもどこかニュアンスが違くと、潜在的におかしなとらえ方をしていたからだろう。

いま最初のプレゼントを思い出してくれ、そのお礼も述べている彼女を見ながら、とても素直な人だと再認識した。

僕達は、6:20のシャトルで出港し、ベイブリッジのイルミネーションや造成中のYES'89の夜景を楽しみながら、山下公園へ着いた。

マリントワーの側に、シックな3階建てのビルがある。

1, 2階は流行を追った店が入っているが、3階へエレベーターで上がると雰囲気はがらりと変わり、レストラン"アンカー"がある。

グルメの本には、JAZZを聴かせる英国風レストランと紹介されているが、食事は100%フランス料理を提供する。

しいて言うならば、インテリアが落ち着いていて英国風ともとれる。

僕達は、予約の定席である窓際の、眺めのよい場所へ案内された。

ビルの2階部分から外の銀杏並木へ照明が当てられ、山下公園を含み海へと続く、とても広い庭を造りだしている。

白ワインで乾杯した。

料理はオードブルから始まり、グリンピースのスープに彼女はとても感心していた。

スズキと牛フィレステーキの間に出たシャーベットは、柚がとてもさっぱりしていて、口直しに最適だった。

僕達は、2週間後にせまった彼女の結婚について話し合った。

彼女は、教会で挙式を行う。

本来キリスト教はとても厳格で、神父さんは自分が納得しないと立ち会ってくれないそうだ。

彼女は、先日神父さんの所へ行き、テストを受けて来たと話してくれた。

結婚とは何か、夫婦間の本当の信頼とは何かを具体的なケースを提示して質問を受け、彼女はごく月並みな回答しか出来なかったと言った。

僕は彼女から、同じ質問を受けた。

僕は何故人間は生きているかを、僕の理念に基づき彼女へ説明したことがある。今回もその理論を展開し、回答した。

時空間を形成するのは、エネルギーの集合であり、エネルギーの流れは時間を刻む。

時空間はアナログ的に無限大数重なり合い、全ての次元はエネルギーの変調によって発生し、さらに次の変調によって前の次元は消滅する。

1人の人間は複数の次元にスペクトル的に存在し、全ての次元の集合が完成された1個人を表現できる。

我々は、一部の次元しか認識できないため、あたかも不完全な生命体のように感じているが、本来は完全である。

1組のカップルがこの一部の次元に於て不完全であっても、全ての次元を集合すると完全である。

完全とは、我々が一部の次元で認識している倫理や道徳では証明出来ないものであり、たとえ1組のカップルがこの一部の次元で失敗したとしても、それは集合された次元では完全の一部を成している。

一部の次元に存在する神は有り得ないと、僕は宗教をも否定した。

彼女は、学生時代に神の声が聞こえたというその神父さんと僕が、一度会えばおもしろいと楽しそうに言った。

食事は、フルーツに柿、デザートにアイスクリームとケーキを頂いて、COFFEE で仕上がった。

食事と彼女との会話に熱中してしまった僕は、ピアノとベースで聴かせるJAZZのライブが、45分の演奏と30分のインターバルで続けられていた事以外、頭の中に残らなかった。

僕達は、関内駅近くのCOFFEE ショップ”砂時計”まで歩いて行くことにした。

センタービル裏手に、”砂時計”がある。

以前、彼女といっしょに見つけた店だ。

店内はいつもJAZZがかかっている。

だがテレビもついていて、JAZZなんてとんでもないという客も多く出入りしている。

一度とてもよい曲が流れているときに、店のオーナーへテレビを消してくれないかと頼んだ事があった。

オーナーは、ここは客がどのようにくつろいでもよい店だと僕の申し出をやんわり断わったが、アンプのゲインを上げてくれた。

店内には、マイナーなJAZZバンドのコンサートポスターや以前に店内でやったライブの写真が、多数張り付けられている。

僕は何度か通ううちに、大好きになってしまった。

僕達は、10年以上前に聴いたブリティッシュロックやオートバイの魅力を、それぞれいつものように話していた。

リストウオッチを確認すると、23時になっていることに気が付いた。

”砂時計”は、22時に閉店だ。

僕達以外の客は、常連らしき人がカウンターに1人だけいた。

明日が祝日のせいか、閉店していたのに追い出されずにいた。

”砂時計”を出た僕達は、センタービルのわきを抜け駅の北口へ着いた。

いつもの別れであれば、それぞれのホームへ上がり、先に来た電車に乗ってお互いに手を振る。

今日はそれが出来そうにない。

歩くスピードが遅くなる。

数歩先を歩いている彼女を呼び止める。

僕は彼女の肩を抱き、「さようなら」を言いたい衝動を押さえた。

小さく「じゃあ」と言う僕に、彼女がとても悲しそうな表情をした。

彼女と別れ、JRのガード下を歩きながら、この時空間を刻む砂時計の壊し方を考えた。
時に流され、砂に埋もれる自分に涙があふれた。

今日が終わろうとしている。

思い出せば素敵な彼女達

友人の出産祝いを兼ねた夕食会の帰り、彼女と僕とその友人は横浜から遠ざかる方向の電車に乗った。

車内はそれほど込み合っておらず、3人は並んで座ることが出来た。

僕は、右隣の彼女に向かって言った。

「妙子、12月21日が誕生日だったよな」

「ええ、もう27」

彼女は、僕の左に座る友人にもよく聞こえるように答えた。

「なにかご馳走しよう」

「うれしい」

彼女は僕の誘いに素直に喜んでくれた。

1駅が過ぎて、友人が下りるしたくを始めた。

僕はまだ1度も名刺を渡していないことを思い出し、プライベート用のシステム手帳から取り出すと、彼に渡した。

彼も膝に乗せたアタッシュケースを開け、たっぷりと膨らんだ業務用のシステム手帳から取り出した。

慌てていたせいか、名刺は2枚重なっていた。

僕は1枚を手帳にしまうと、もう1枚を彼女へ渡した。

電車が止まり、彼が下りた。

彼はそのままホームに立ち止まり、発車するのを待っていた。

ドアが閉まり、電車が動き出した。

彼は僕達2人に手を振りながら、面白い顔をしてみせた。

「なんだあいつ、麻子にそっくりだな」

「そうだよ、麻子ちゃんもよくあんなことしていたわね」

僕達2人は、共通の友人である、すでに結婚した女性のことを思い出していた。

「あいつ、なにやっているかな」

僕は口に出さずに、言ってみた。

妙子さんと僕は、JRで1つ隣の駅に住んでいる。

電車を下りるのは僕の方が先だ。

「じゃ、また。製本の見積が出たら連絡を頼むよ」

僕は書き溜めた20作の雑文原稿を渡し、彼女の会社へ出入りする業者に製本を頼んでいた。

僕は地下に設置されたホームを、中央の階段へ歩き始めた。

電車が発車して、彼女の乗った車両が僕の左側を加速しながら通り過ぎた。

彼女が振り向きながら手を振ってくれた。

僕は右手をあげて応えながら、妙子さんと麻子さんの微妙な違いについて考えてみる価値があると、ふと思いついた。

2 2週間後、製本された雑文を受け取るために、僕はいつも下車する駅前で彼女を待っていた。

12月まであと少しを残し、朝夕は冬らしく冷え込んで来たが、暖冬と言ってもよい気候だった。

僕はライナーを外したコートを着込み、改札に近いベンチに座っていた。

大船方面の電車が到着して、そろそろと降客が出てきた。

改札を出た彼女は、しばらくの間1人の女性と話し込んでいた。

僕には見覚えがなかった。

やがて話し終えた彼女は、まっすぐに僕の方へやってきた。

「お待たせ。いま話していた人、千織ちゃんの妹さんよ」

「そうか、でも似てないな」

僕はベンチを立ちながら、昔同じ職場にいた姉さんの方を思い出していた。

僕達は駅前の通りを下って行き、ドラッグストアの手前にある、十分な広さの駐車場を備えたレストランへ入った。

「あら、ここ知ってる。でも違う店みたい」

「そうかい、でも4年くらい前からあるよ」

「建物の外観は同じなんだけど」

「そういえば、だれかも同じ様なことを言っていたな」

大きなテーブルに案内された僕達は、店員に我が俣を言って一番奥の席を選んだ。

食事は少し軽いものを、と言う彼女の希望で、僕達はスパゲティーとCOFFEEを注文した。

オーダーが運ばれるまでの間に、彼女へ尋ねた。

「製本はどうだった？」

「出来たわよ。はいこれ」

「じゃ、1冊あげよう。あれっ、おかしいな」

「どうしたの？」

「これは原稿だけだ」

「あら、どうしよう」

彼女は出来上がった10冊の包みを忘れてきたらしい。

僕は黒いプラスチック製のバッグを開けて、中を確認した。

原稿と仕様書、それに領収書とお釣りが入っていた。

僕はよい意味で彼女らしい失敗だと思った。

彼女はポケットカレンダーを取り出すと、次に渡せるチャンスを調べた。

その週の土曜日に、僕が彼女の家へ受け取りに行くことになった。

食事を終えた僕達は、2杯目のCOFFEEを注文し、雑分の内容について話し始めた。

彼女は、登場する人物達が僕の目を通して自分自身を見た場合、どのように感じるかを質問した。

僕は自分の感じたことを書くよりも、状況を巧みに描写し、読む人が成り変わることで感じることを優先すると説明した。

僕は自分なりの書き方を思い起こしてみた。

過去の事実を並べ、ストーリーを作る。

もしくは、ふと思い付いたストーリーを過去の経験で肉付けする。

主題を定義付け、ストーリーが独立した世界を持ちうるレベルかをチェックし、論理的に流れるように修正を加える。

ストックしている素敵な言葉達でストーリーを展開し、書き上げる。
僕が第三者に成り切って雑分を読む。
読んで心地よいかをポイントに、修正を加える。
情景描写は出来るだけ正確に、人物描写は憧れを増幅する。

10時近くになって店を出た。
彼女が店を振り返った。
「確かに、来たことがあるわ」
僕は誰かに教えてもらった店名を、突然に思い出した。
「ルーシーハウス」
「そうそう、それよ」
彼女が続けた。
「食べる处と、ファンシーグッズを売るコーナーがあつて」
彼女は、僕の知らない世界を思い出していた。

3 約束の日、午後の日差しに切り替わってから、彼女の家へ電話をかけた。
僕はこれから出ることだけを告げ、ライダーズウェアに着替えた。
髭を剃るために洗面台へ向かうと、革パンツの物々しさが訪問にそぐわない気がしてジーンズへ着替えた。

自転車置き場からオートバイを引き出すと、暖気運転に時間をかけてスタートした。
彼女の地図を頼りに約7分で到着したが、約束の時間には15分ほど遅れていた。
表の路地にオートバイを止め、玄関のチャイムを鳴らした。
彼女の声が聞こえてから、僕は慌ててヘルメットを取った。
彼女が引戸を開けると、あがり口に彼女の両親が立っていた。
僕が挨拶を交わすと、彼女が上げれと言った。
僕は手ぶらで来たことを口実に辞退したが、彼女の勧めを断わりきれなかった。
オートバイをそのままにしてよいかを確認すると、彼女の父親がガレージの門を開けてくれ、入れるようにと言ってくれた。

玄関を上がると、2階の彼女の部屋へ通された。
部屋は和室と洋間の2部屋で構成され、特に仕切りは設けられていない。
僕達は畳の上でガラス製のテーブルを挟み、差向いに座った。
今日部屋に運び込んだというテレビの上には、小物の人形類がたくさん飾られていた。
僕が昔ホワイトデーに贈った、チョコのおまけに付いていた動物達までが並んでいた。
床には、8トラックとカセットを備えたチューナー付カラオケセットが置かれていた。
僕が電源が入ったままなのを指摘すると、ラジカセ代わりに使っていると説明してくれた。
彼女が笑いながら、僕の観察癖を指摘した。
僕達は、彼女の母親が差入れてくれたケーキとCOFFEEを頂きながら、午後のひとときを楽しんだ。

僕は製本された雑文を受け取り、パッケージを開けて1冊取り出すと、彼女へ渡した。
受け取った彼女は目次を開き、いくつかのタイトルを口にしてから1つのストーリーを選んだ。
選ばれたタイトルを見て、僕は彼女らしいと思った。

僕は独身女性の部屋にどの程度の時間まで滞在を許されるだろうかと、ケースバイケースで考

えながら言った。

「そろそろ帰ろう」

「何処か行くの？」

「うん、カセットプレーヤーを修理に出してから帰宅するよ」

「わざわざ来てもらって悪いわね」

「とんでもない、ところで BIRTHDAY はいつやろうか」

「空いているのは、来週の月／火もしくは最後の週の月／火／水あたり」

「そうか、じゃとりあえず最後の週の火曜にしよう。月曜日は休みの店が多いんだ。」

僕は誕生祝いに食事をする日を決定し、彼女の部屋を出た。

ガレージからオートバイを出して、雑文をシートへくくり付けた。

「250cc だけ？」

彼女がじっくりと外観をながめて言った。

「そうだよ、来年で10周年だ。ほら、0泊2日伊豆魚食いツアーを憶えているかい？ 高速のインターでこいつの上に乗って写真を撮っただろう」

「そういえばそうね、あのときは疲れて辛そうだったわね。車買わないの？」

「10周年を祝ったら、もう1台オートバイを買うよ」

「じゃ、これ売っちゃうの？」

「思い出が多くてとても手放せないね。2台所有するだろうな」

僕は10年間のツーリングのいくつかを思い出していた。

エンジンをかけシートに座ると、12月の冷たさが伝わった。

ゆっくりとクラッチをつなぎ、スタートした。

路地を来た方向へ戻り、川に面したT字路に出た。

バックミラーを見ると、彼女が家の前で見送ってくれていた。

僕は右手を上げて彼女へ挨拶を出し、一方通行の規制が2輪を除外しているのを確認してからT字路を左折した。

4 横浜駅の東口、ルミネから郵便局へ上がる大きな階段の前で僕は彼女を待っていた。

今日は朝からお天気がぐずついたせいか、久しぶりに袖を通した革のロングコートが暑くなり、首に巻いていたバンダナをポケットへしまった。

僕は風がよく通る階段のへりまで移動した。

ここは待ち合わせのメッカではあるが、年の瀬もおしつまったせいか、人待ち顔の人は意外に少ない。

約束の時間を15分ほど過ぎて彼女がやって来た。

彼女は一見すると、きつい印象を人に与える。

本来のおっとりとした性格とは裏腹に、あぶない雰囲気も持ち合わせており、連れだって歩くと自分がいい男になったような錯覚を感じる場合がある。

これも”いい女”の条件かもしれない。

「ごめんなさい、遅れちゃって」

「やあ！ だいじょうぶだよ。シーバスの最終は19時なんだ」

「今日が御用納めだから、ごたごたしちゃって」

「例の、お歳暮抽選会？」

「そうなの、なかなか終わらなくて」

僕達は地下街を通らずに、陸橋からデパートの回廊を抜けて連絡通路へ入った。
チケットを購入し、彼女と並んで待合室のベンチへ座った。
既に4組のカップルが最終便を待っていた。
彼女は初めて乗るらしく、待合室の雰囲気を楽しんでいた。

程なく乗船が始まった。

僕達は船室へ入らずにデッキへ出た。

シーバスは、定刻に少し遅れて出航した。

「あら、ベイブリッジがよく見えるのね」

「うん、こちら側に沈む夕日はシーバスで最もよい眺めなんだ」

「ベイブリッジのライトアップはもう見ました？」

「帰宅する時間帯では遅くて、残念だけどまだ」

「会社からも見えるの、とてもきれいよ」

山下公園へ到着し、僕達は小さな浮橋から上がった。

ゲートを抜けようとする、発着場からスピーカーを通した案内があった。

誰かが船内に忘れ物をしたらしい。

「大丈夫かい？ なにか忘れていないかい？」

「ちょっと待って。大丈夫よ」

彼女は立ち止まり、バックと紙袋をかき回すと忘れ物がないことを確認した。

銀杏並木の道路を渡り、ポートスクエアへ到着した。

レストラン“アンカー”は、僕にとって1年ぶりだった。

「ここが五つ星のアンカーだよ」

「あら、こんなところだったの」

僕は1年前に退職した職場に、グルメの本をいくつか置いてきた。

“アンカー”はその中に掲載されており、僕が星を五つ書き込んでいたせいか、元の職場では話題になっていたらしい。

たまに昔の同僚達に会うと、この店を聞かれる事があった。

“インテリアやライブ演奏の雰囲気で一つ、料理で一つ、接客で一つ”

心の中で星の数を数えてみた。

本来は三つ星だが、個人的ないくつかの思い出に、僕は二つおまけしていた。

ポートスクエアの階段を上がろうとすると、突然彼女に呼び止められた。

「どうしよう、さっきの忘れ物は私だわ」

彼女はもう一つ紙袋を持っていたことを、すっかり忘れていたらしい。

彼女らしい、確認しても避けられないうっかりと、新たな雑文のねたをもらった事で、僕はとても楽しくなった。

発着場へ戻り、従業員から紙袋を受け取ると“アンカー”へ入った。

ちょうど予約した時間になっていた。

コートを預けると、窓際に案内された。

以前に座ったことのある席だった。

メニューを渡された僕達は、時間をかけて選択した。

「たくさん食べられるかい？」

「そうねえ、お魚を食べたいわ」

「手伝ってあげるから肉と魚の両方はどうだい？ もし足りなかったらデザートにチーズを追加

しよう」

僕は、ここでのオーソドックスなフルコースと白ワインをオーダーした。
ウェイターは、今日出す料理の詳細を説明してくれた。

ワインが運ばれると、彼女は僕が頼んでおいたJ A Z ZのCDを取り出した。
そして僕にクリスマスプレゼントも渡してくれた。
CDは半月ほど前に彼女へF A Xを送り、社内販売品として安く購入してもらった物だ。
彼女からクリスマスに何が欲しいかと聞かれていた僕は、そのF A Xの中にそれとなく希望を書き込んでいた。
CDの品番、品名を羅列した一覧表へ、「品番：ネクタイ、品名：グレー系ジャケットに似合うもの、メーカー：妙子のお気に入り」と僕は記入していた。

彼女との話題は、結婚を前提としてお付き合いしている男性とのいきさつだった。
僕の周りの素敵な女性達は、適齢期をむかえているせいもあり、この店へ来ると同じような話題になることが多い。
その都度何か彼女達のためになるようなストーリーを話すか、彼女達はお互いに仲がよいので同じ話はしない事にしている。
今日は僕の父親との親子としてのかかわり合いを、自分の生き方に対するポリシーをおりませて彼女へ話した。

僕は9才の頃に、父親からフォークとナイフの使い方を教わった。
田舎の繁華街にある有名なレストランへ入り、僕と父はカツカレーを食べた。
日曜日だった。
カレーライスとは別の皿に、生野菜と大きなカツが1枚乗っていた。
父は僕に合わせてゆっくりと食べてくれた。
次の日曜日にもカツカレーを食べた。
3度目のカツカレーで僕の使い方に満足したのか、それ以降行った覚えはない。
今でもフォークとナイフを器用に使うケースに遭遇すると、父と食べたカツカレーを思い出す。

僕はこうやって彼女の誕生日と一緒に食事をするのも、必ず自分を育てる啓発として役に立つと説明した。

いつか僕は、自分の息子とこのような店で食事をするだろう。
僕の前では、息子が皿の上のステーキと格闘を始める。
そして僕はJ A Z Zのライブに耳をかたむけ、窓の外を眺めながら素敵な彼女達を思い出しているに違いない。

60マイルブレンド

マンションの駐輪場からオートバイを引出し、メインスタンドを立てる。エンジンを始動して、アイドリング状態にしたまま工具を並べる。2ストローク特有の頼りない爆発音と、サイレンサーから吐き出される排気煙が辺りに漂う。ミッションケース内のオイルは、このようにしてエンジンを暖めないで油温が上がらず、ケース内へ残ってしまう。

17mmのボックスに、エクステンションバーを連結し、レンチのハンドルへ固定する。廃油吸収材の袋をひろげ、車体の下へセットする。エンジンを停止すると、ボックスをドレンボルトへかぶせ、隙間が出来ないようにエクステンションを手で支える。

最初の1/8回転を丁寧に緩めると、あとはラチェットを利用して手早く回す。抜けきる数回転は、吹き出すオイルでボルトを落とさないように、レンチを外して右手で回す。

慣れれば、手を汚すこともない。

オイルが吸収材の中央部に落ちるのを見届け、しばらくの間放置する。

短時間に排出するには、注入口のキャップをはずしておくのも忘れないことだ。

現代の2ストロークエンジンは、分離給油を採用しているためにオイル交換はトランスミッションのみとなる。

4ストロークのように、クランクから燃焼室へ上がってしまうオイルがないため、定期的に残量を調べる必要がない。

ただし、シーズン前に交換を心がけておく条件が付く。

ボルトの汚れを潤滑材で洗浄し、ドレンへセットする。

1度止まるまで手で回し、最後の1/6回転をレンチで締めるのがコツだ。

トルクは、緩めたときの力を頼りに感で調整する。

アルミエンジンだからといって、あまり気にする必要もない。

バイクショップで交換すると、工賃を含めてかなりの経費を覚悟する。

個人で整備すれば、廃油吸収材を考慮しても半額に収まり、工具もボックスレンチ以外は特別なものを必要としない。

残りの予算で、"60 Mile Blend"が可能だ。

平塚を抜け、西湘バイパスへ上がる。

大磯港からのジャンクションを過ぎると、レーダー式の数値取締り装置に脅かされることもなく、大磯プリンスホテルを越えるまで直線が続く。

強いオンショアの日にここを走行すると、フルフェイスのシールドがくもるのに数秒とかわからない。

そのまま走行を続ければ、150km/hオーバーで30秒近くクルージング出来るが、ロングビーチの手前で、1度バイパスを降りる。

国府新宿の交差点へ出る前に左折し、ロングビーチのゲート前を通過して、プリンスの入口へと続く桜並木を走る。

私道のせいか、夏のシーズン以外は通る車も少なく、適度なアップダウンと共に落ち着いた景色

が続く。

ここは、ソロツーリングで楽しめる数少ないポイントだ。

警察署前から1号線を通り、国府津のジャンクションから再びバイパスへ上がる。

この区間の一般道走行は、料金所をパスする形になる。

10分近い遅れを発生するが、あまり苦にはならない。

川をオーバーパスする形でバイパスへ進入すると、ゆるい下り坂になり、サービスエリアを眺望できる。

進入路へ乗ると、ギアを落して50km/hまで減速する。

ほぼ180°のターンをフルバンクで回る。

大型車専用のパーキングを通過し、小型車のエリアへ進む。

ここで休息を取るライダー達は、パーキングエリアから外れ海岸寄りの堤防に沿って停める。

7~8年前のオートバイブームから、このように変わったと覚えている。

よく晴れた休日は、新、旧30~40台が並び、さしずめ壮観なミュージアムと化す。

パーキングの外周を大きく回りながら、今日の停止位置を捜す。

場所を見つけると、15m程手前でキルスイッチを入れ、エンジンを停止する。

続いてヘッドライトを消し、シールドを上げると慣性で停止位置まで進める。

リアブレーキをうまく使いピッチングしないように止め、サイドスタンドへ車重をあずける。

メインキーを抜いてフルフェイスを取り、右のミラーにかける。

潮風が、押さえられていた髪を自由にしてくれる。

リアシートに固定したツーリングバッグから、財布と小銭入れを取り出し売店へ向かう。

以前は食券で売られていたCOFFEEが現金と交換になった。

レギュラーブレンドをペーパーフィルターに入れてくれる。

小銭入れから硬貨を2枚取り出し、ミルクを残して受け取る。

オートバイへ戻り、堤防に腰掛けて海側を眺める。

往復約100km、ガスは8リッターで十分だ。

COFFEEを1口飲む。

ごく普通のレギュラーが、凝ったブレンドを超える。

僕が読んだ「横浜 KENTAUIROS の伝説」には、1杯のCOFFEEを神戸まで飲みに行く、「600マイルブレンド」の逸話が書かれていた。

バイクフリークに有名なストーリーだ。

僕自身の「60 Mile Blend」は、年に25回を超す。

休日の昼下がりに、堤防の上で昼寝をする僕を見つけるのは、それほど難しくない。

午後のケーキと彼女達

JR大船駅で乗り換え、定刻に保土ヶ谷駅へ到着した。
ホームは1本しかなく、横須賀線以外の電車は発着しない。
5月の第2週、昨日に引き続きとてもよく晴れている。
半袖シャツに中国服の重ね着は、午前中だけで十分だろうと思った。

改札を出て、ベンチへ掛ける。
駅構内に設けられたハンバーガーショップでCOFFEEをオーダーしたい欲求にかられたが、天井吊りの時計を確認してためらった。
麻子さんとの約束の時間を、ほんの少し過ぎていた。
今日は彼女と二人で、香さんの家へ招待されている。

下り線が到着し、平日にしては意外に多くの降客が改札を出て来る。
彼女が一目で僕を発見し、こちらへ向かう。
白地に植物をあしらったワンピースが、初夏にとってもよく似合っていた。

「こんにちわ」
「今日の靴は大丈夫かい」
新しい靴で歩けなくなった昨日の出来事を思い出し、僕は真面目な顔で冗談を言った。
彼女は途中で買い換えた靴について、その後の顛末を楽しそうに語ってくれた。
見なれない靴が玄関に並んだことで、夜中に心配した家族と一悶着あったらしい。
僕達は香さんの家に何を持って行くかを相談したが、結論が出る前に駅前を散策することにした。

国道側へ出て、通りに沿った商店街を歩く。
歩道上は商店からの軒で覆われ、どの店も、木製の引戸が似付かわしい風情だ。
50m程歩くと、コンビニエンスストアを2軒見つけた。
商店街は、ここで終わりになる。
僕達は両方のストアへ入り、自分達の食べたいアイスクリームと最近また見かけなくなったドクターペッパーを購入した。
ドクターペッパーは、かつてミスターピブと呼ばれ九州地区に限り販売されていた。
今でも僕の選ぶ炭酸飲料ベスト3へ必ず入る。
以前に一時期見かけなくなったときは、横須賀のドブ板までオートバイで出かけていた。
米軍基地前のハンバーガーショップでは、店で飲む価格と同じ市価の2倍でテイクアウトすることが出来た。

駅へ戻り二人でベンチへ腰掛ける。
僕は携帯していたカメラを膝へ乗せ、通路の途中へ予めピントを合わせておいた。
香さんがそこを通過するとき、シャッターを押すつもりだ。
僕達は彼女がどんな服装でやって来るか予想してみた。
「白のジーンズに、黒のトレーナーかポロシャツ」

僕の予想を先に言うと、

「白のジーンズは、香さんらしいわね」

と彼女は半分賛成してくれた。

「スニーカーも白かな」

僕達が適当なことを言っていると、白のジーンズにピンクのトレーナーを着た香さんが現われた。

僕は目測でフォーカスリングを移動しながら、3回ほどリリースを切った。

国道を渡り、香さんの家へ向かう。

「ここが、米担ぎの坂です」

「ここが、灯油転がしの階段です」

僕が以前に香さんから聞いた彼女の買い出し失敗談を麻子さんに話すと、肝心なところを省略するために、香さんがあわてて補足の説明を付け加える。

日差しの落とす僕達の小さな影が、正午に近いことを教えてくれる。

少し丘を上がると、国道の喧騒が嘘のように静けさが増す。

彼女のアパートは、4戸建ての2階にあった。

室内はきちんと整理され、彼女の性格からかとても清潔だ。

片付けがあまり得意ではない麻子さんがしきりと感心している。

三人で相談した結果、お昼を少し遅らせとりあえずお茶にすることにした。

持参したパーコレーターで、僕が COFFEE をサービスする。

豆は器具に合わせて今朝挽いたコロンビアと、ブルーマウンテンブレンドの缶入りを準備して来た。

彼女達は、二人とも COFFEE が好きだ。

僕達はリビングへ通され、抽出したばかりの COFFEE がテーブルへ並んだ。

カップはウエッジウッドの優しいタイプが使われていた。

リビングは1面がAVラックで占められているが、高さは天井までの半分に抑えられ部屋の広さに合わせたバーチカル収納の思想を彼女なりに消化しているようだ。

僕はふと雑文のストーリーを思い付いた。

この季節とテーブルの上の1杯の COFFEE から、香さんの日常を小説風に想像してみた。

4分の抽出時間でガスレンジのコックを閉める。

パーコレーターの上部に設けられたガラストップの蓋へリズムカルに吹き上げていた COFFEE が、しだいにその繰り返しスピードを落としてゆく。

午後の静けさが漂い始める。

お気に入りのカップへ COFFEE を注ぐと、リビングのテーブルへ運ぶ。

ベランダから入る風がゆっくりと部屋の中を通過し、ときおり揺れるカーテンの白さがこの季節に似合っている。

AVラックの上から、先程配達されたメールを手にとってみる。

差出人の名前には、本名へペンネームが併記されている。

彼女の表情に穏やかな微笑が浮かぶ。

ラックの引出しからペーパーナイフを取り出し、左手でしっかりと支えながら封を切る。

TYPE II のオーディオカセットとワープロでプリントしたレターを取り出す。
テープをデッキへセットしプレイボタンを押すと、60年代初期のブルーノートが室内を満たし始める。
レターをテーブルの上へ丁寧に広げ、COFFEE を一口だけ飲む。
膝頭を抱え JAZZ に耳を傾ける。
レターはテープの片面が終了してから読むことにする。
スピーカーからこぼれ落ちたベースとピアノが、彼女を心地よく包み込む。
時の流れがゆるやかになり、彼女が風に融け込んで見えなくなる。

僕達は香さんの料理を御馳走になり、部屋の中で記念写真を撮った。
カセットデッキが、フュージョン・サウンドを再生している。
香さんも JAZZ が好きだ。
ピアノとサクスの特徴を聴いていると、クルセイダーズを連想させる。
彼女にアーティストを確認すると、曲目が書かれたカセットケースを渡された。
ジョー・サンプルのリーダーアルバムだった。
了解を得て、テープとCDの引出しを開ける。
僕が録音したテープも一緒に入っていた。
曲目はオリベッティーのタイプライターで打ったものを、そのままインデックスへ入れて使用していた。
僕の手書きで渡しても、書き換えることはないだろう。
彼女の手へ渡ったものは、その瞬間から時間が停止し、思い出のように凍結されるような気がした。

西日が穏やかになりかけた頃、香さんがチョコプディングを作ろうと提案した。
僕がステンレスボールでバターを溶かすことになった。
ボールの底を手で暖めても、なかなか溶解しない。
ドライヤーで温風を吹き付ける方法を思い付いたが、香さんがお湯を入れた大きなボールを持って来てくれた。
麻子さんが心配そうに覗き込む。
しかし泡立て器にからみついたバターは、ボールの熱が伝わらず、底に残った部分がまるで熱いトーストの上へ広げたようにさらさらと流れた。
チョコプディングは、僕の不手際にもかかわらずとても美しくテーブルへ登場し、しかも美味しかった。
麻子さんが感心して、香さんに作り方を聞いている。
テーブルの上へ広げられた香さん手書きのレシピを見ていると、僕にも作れそうな気がした。
休日の昼近くは、TVでお菓子のプログラムが放映されていることが多い。
いつ憶えてしまったのか、BPがベーキングパウダーのことだと読み取ってしまった。
香さんが麻子さんに、駅前のストアでコピーをとるように勧めている。
ほんの少し僕の世界の外側を見るような気がした。
彼女が彼女に盗られる。
どちらがどちらにと限定できないため、嫉妬ではないような気もした。
がしかし、彼女達の世界に入りたい不思議な感情に揺り動かされ、

「僕も、欲しいな」
と言うと、麻子さんが驚いた表情をしている。
異性がケーキを作る不思議さに、純粹に驚いているようだ。
僕は美味しい COFFEE をいれる作業となんら変わりはないように思い、作る過程をビデオで撮影して彼女達に見せることを約束した。

麻子さんと僕は、古い友人達と夕食を取るようになっていた。
香さんが駅まで送ってくれる。
駅前のレンタルショップでレシピを二人分コピーし構内へ入る。
切符を購入して、次回は僕の家へ集まることを提案した。
香さんが賛成してくれる。
改札で別れ、麻子さんとホームへ下りる。
「香さんは、あそこを通るはずだよ」
僕が国道の方を指さすと、
「気が付くかしら」
と彼女が言った。
やがて香さんが現れ、ホームに立つ僕達を見つける。
二人で手を振ると、立ち止まり、微笑みながら振って返す。
僕は彼女の写真を撮るために、ホームの前へ出た。
カメラを構えて望遠側へズームングすると、ファインダーに映る彼女の表情が笑顔に変わった。
「引き留めちゃ悪いわね」
麻子さんの声を後ろに聞きながら、彼女が僕に何か悪戯をしているのがわかる。

上り線が入り乗降が始まる。
麻子さんがドアの側から盛大にハンカチを振っている。
僕はこのような性格が彼女にぴったりだと思った。
もちろんよい意味で大好きだ。
周りの乗客が笑っている。
僕も笑っている。
香さんも笑っていた。

THE SUMMER SOLSTICE

デスクへ戻ると、フロッピーケースの中にメモが入っていた。

”おちこんでるゾ どーする？ 責任とって！！”

メモには、先日の僕の言葉に対するリアクションが書かれていた。

僕は急いで書類の山を片付けると、PCへ向かって彼女を食事へ誘うリプライを入力した。

彼女のアンサーバックは、横浜へ出て COFFEE 豆を購入し、夕食を御馳走する僕の提案に同意していた。

6月の最終水曜日、梅雨空は昨日からの雨が続けている。

定時に退社すると、待ち合わせの場所へ向かった。

少し遅れたせいか、約束の場所より手前の陸橋の上に彼女がいた。

一度はこのようにして女性を待ってみたいと思っていた僕は、そのシーンを先取りされてしまい、ほんの少し遅れたことを後悔した。

きっと彼女のことを考えながら黄昏時に見おろす景色は、流れる車のテールライトが雨にかすみ、雑然とした街並を素敵に隠してくれたに違いない。

交差点内でタクシーを止め、品川へ向かう。

バス以外の交通機関は特になく、三田5丁目は陸の孤島と言われている。

「横浜へは、よく行くのかい」

都内に住む彼女へ聞くと、めったに行かないと教えてくれる。

これから行く山手は、4年ぶりらしい。

僕達は、京浜東北線を利用して横浜へ向かった。

彼女が楽しそうな表情をしている。

僕はいまの気持ちを聞いてみた。

「いつもと逆の方向へ向かう気分は」

「なんて言うのかな、わくわくしてる」

「遠足のような」

「そうね」

彼女が話題を変え、話しを続ける。

「わたしねえ、バスが嫌いなの」

「どうしてだい」

「おつりをもらうときに、運転手さんにおこられちゃうの」

彼女は両替タイプとおつりをリターンされるタイプの、異なる仕組みに腹を立てていた。

最初に乗った電車は横浜まで至らず、途中で後続に乗り換えた。

山手で降りた僕達は、歩いてすぐの”まめや”へ向かう。

店頭にはいつものユニオンジャックが立て掛けられているが、今日は雨にうたれて元気がない。

「ここだよ」

「あら、素敵ね」

「あれ！ なんだこれは」

「どうしたの」

「鍵が掛かってる」

店内はいつもとかわらない様子だったが、だれもいなかった。

僕達は隣のレンタルショップへ入り、時間を潰すことにした。

彼女がユーミンのCDを捜している。

JAZZはあまり聴かないらしい。

僕はバラードなら聴いてみたいと言う彼女に、フュージョン系のそれらしいテープを作る約束をした。

”まめや”へ戻り、しばらくするとマスターが帰ってきた。

友人に頼まれたブレンドと僕のクリスタルマウンテンをオーダーし、二人で作り付けのベンチへ腰掛ける。

彼女が”まめや”に来たのは今日が初めてだが、以前からここでオーダーできるスペシャル・ブレンドを持っている。

コロンビア、マンデリン、ブラジル、モカマタリを、それぞれ4、3、2、1で配合した物だ。

オーダーは、マイルドで濃があり、ちょっぴり苦いけれど酸っぱくないものという指定だった。

出来上がったブレンドには、代理で購入した僕が名前を付けた。

初回オーダーの日になみ”SUMMER SOLSTICE SPECIAL”、最も昼の長い日だった。

今日のサービス COFFEE が、切株で作られたテーブルへ並ぶ。

店の推薦するオリジナルブレンドの一つだ。

特に際だった癖はなく、薄めに抽出された味は安らぎに近いものを持っている。

ただし、ここで出されるカップにはどうしても馴染めない。

かなり使い込まれているのはかまわないが、落ち着きがない。

自分のカップをキープ出来れば、完璧ではないだろうかと思った。

店頭に並べられた生豆の湿気を、彼女が気にしている。

マスターに彼女の意見を伝えると、ローストした豆を並べる店に比較し、まったく問題がないことを強調していた。

マスターの言っていることは、ほぼ間違いないだろう。

多湿での生豆の保存は、かびにだけ注意していればよく、この店の消費量から考えるとその心配もなさそうだ。

僕達は一駅戻って、石川町へ出た。

僕は1年ぶりに”栗ノ木”へ行きたくなり、夕食はスパゲティを薦めた。

「どんな店なの」

「スパゲティの専門店だけど、昔はタコスがうまくて、冬にやっている雑炊もいけるし」

メニューにないものばかり言うと、スパゲティの種類をいくつか聞かれた。

僕の説明に一応の満足を示したが、彼女の好みを聞いておくべきだったと少し反省させられた。

”栗ノ木”へ入り、窓際に沿った奥のテーブルへ着く。

僕達の他に客はいない。

彼女が海老と帆立のホワイトクリームソースをオーダーし、飲物にはアップルタイザーを選んだ。

ここでまたお気に入りを先行されてしまい、僕は少し悔しい思いをした。

好みをすでに知っている女性ならかまわないが、後から同じ物をオーダーするのは、真似をして

いるようでなんとなく落ち着かない。

僕は若鳥と茸のトマトソースを選択し、ジンジャーエールを頼む。

夕食にスパゲティだけだと少し寂しいので、シェフ推薦の野菜サラダも追加した。

彼女と食事をするのは、今日が最初ではない。

仲よくなりかけた頃、一度食事へ行こうと誘っていた。

特に日を定めていなかった僕は、一ヶ月前のある日突然に、今日にしましょうと言われた。

その日僕達は、品川のレストランで景色を眺め、デザートを頂いていた。

恋愛について話し始めた彼女が、失恋を僕に訴えた。

彼女の目に涙が溜り、次々にこぼれ落ちた。

話す言葉はあまりにも透明で、すぐに僕の心へ染み込んでしまう。

絶えることなく落ちる涙は、砕け散るのが惜しいくらいに輝き頬からすくって食べたい衝動を覚えた。

僕は隠すことなく素直に語れる彼女が、大好きになってしまった。

約1ヶ月を経過して随分と落ち着き始めていた彼女は、昨日彼と会う場面に遭遇した。

とても動揺した彼女は、今日僕のフロッピーケースへメモを入れた。

サラダと飲物が運ばれてきた。

僕がブロッコリとカリフラワーが嫌いだと言うと、彼女が箸を巧みに使い素晴らしいスピードでブロッコリを食べ始める。

リズムカルに箸を運ぶ動作が、眺めていて気持ちよい。

いかにも彼女らしい、ジョークを用いた優しさの表現に感心する。

今日の彼女はストライプのシャツがよくマッチングし、外したままの袖の第2ボタンが漂う雰囲気を感じさせる。

僕は、"ふっ"と彼女との距離を縮めるような気分を感じた。

ジンジャーエールを一口飲む。

独特の匂いと炭酸の強さ以外に、喉越しに残る刺激が心地よい。

「おっ、辛口だ」

「普通と違うの」

「うん、飲んでみるかい」

と言うと、彼女が自分のグラスからストローを抜き取り、僕のグラスから少し飲んでみる。

「ほんとだ」

販売中止になった、ウィルキンソンの小瓶に似ている。

他のメーカーや今も売られている200ccサイズは、頼りない味でとても飲めた物ではない。

僕はアップルタイザーをオーダー出来なかった後悔を、少し取り戻した。

しかし、ちょっぴり味を散漫にするクラッシュドアイスが残念だ。

炭酸飲料は、一つだけ大きな氷を入れたイギリス・スタイルに限る。

"栗ノ木"を出ると、裏通りでケーキの店へ入った。

COFFEEで1つのケーキを食べ終わると、彼女が2つ目を迷っている。

彼女は、お菓子を焼くのが趣味らしい。

このような店へ来ると、目移りが抑えられないようだ。

僕は自分の選んだケーキが美味しかったせいか、遠慮しないように薦めたが、1口食べた彼女の表情から推察すると、運ばれた2つ目は選択を誤ったようだった。

21時を過ぎ、店を出る。

僕は横浜駅まで送ることにした。

彼女は東京駅まで25分、さらに乗り継がなくてはいけない。

予定時間をオーバーしてしまったことを詫げる。

まだ彼女のペースに同期させるのが難しい。

東京行が7番線へ入り、ボックス席へ一人で座った彼女が窓を開ける。

発車のベルが鳴りドアが閉まる。

私鉄や地下鉄とは根本的に異なる、JRらしいスピードで動き始める。

お互いに小さく手を振る。

この別れのシーンにぴったりの、いかにも列車らしい加速感が、いつも僕を感動に誘う。

君にそっと教えようⅢ

由比が浜の1本裏側には、江ノ電と並行した通りがある。

この通りを六地蔵から長谷観音へ向かうと、丁度中間辺りにエスニックショップ”ギルド”を見つける。

商店街の賑やかさも六地蔵より住宅街へ変わり、バスの運行路線にもかかわらず路肩に車を止めておくことが可能だ。

横浜から鎌倉へ入る場合、北鎌倉からの最短ルートと朝比奈から鎌倉霊園を通る2つのルートが代表的だ。

少し回り道をするなら金沢八景より逗子を経由するか、大船から江ノ島を通過するルートもある。

僕は彼岸の混雑時期を除き、少し裏道的な朝比奈ルートを好んで走る。

”ギルド”の主力商品は、比較的年齢の低い女性を対象とする装身具だ。

店内には商品のベースとなる材料が所狭しと並べられ、客は希望の物を選択すると彫刻をしてもらう。

ブレスレットから指輪、イヤリングにいたるまで大小に関係なく、店員がリユーターを使用して希望の文字や絵を入れてくれる。

商品の中心価格帯は、材料がアクリルや木製とはいえ300～500円に収まり、ほとんどが人権費だけのサービス価格と言える。

よって中心となる購買層はここ数年でより低年齢層へも移行し、17～18才だったのが12～13才まで拡大したようだ。

但しあまり儲ける気はないと思われるのだが、焼物類や特製の表札などは意外な価格設定をされるケースもある。

オーナーの気分によるのかも知れない。

自宅を出て約20分、僕は”ギルド”の前にオートバイを停めた。

店内の両サイドに設置された棚から、動物をあしらったカップを選ぶ。

少し親しい友人の誕生日には、このカップをプレゼントすることが多い。

羊、犬、狸、豚、ペンギン、一度買い逃すともう見られなくなる動物も多い。

形状は動物をあしらうといっても絵を描く程度ではなく、立体的に作られている。

但し数年前に比較して、造形が線書きに近くなってきたのはとても残念だ。

カップを持ち、客の列に並ぶ。

購入した商品に彫刻を入れないからといって、列の前へ入り先に支払いを済ませることは許されない。

前に並んだ人達の、指輪やキーホルダーの彫物を見ながら自分の順番を待つ。

店内には、エスニックショップらしい有線が常時流れている。

以前はインド音楽が聴こえていたが、ここ1～2年はレゲエが多くなった。

店内の仏教を連想させる宗教的な飾り付けにうまくマッチングしていないが、10～20分待たされる僕としてはこちらを好む。

カップが新聞紙でくるまれると、テーブルに設置されたローラーへお札を挟む。

店の主人がハンドルをくるくる回して受け取るさまは、古い洗濯機の脱水装置をイメージさせる。

お釣りは上部の穴へ落とされ、テーブル内の通路を通過して、こちら側の受け皿へ転がって来る。これら一連のやり取りは、まるで儀式のようだ。

店の主人は、がんとしてこのやり方でしか受け付けないが、若い方の店員は女性や子供達以外からは手でも受け取ってくれることを先日確認した。

”ギルド”がG U I L DかG I L Dなのかはわからないが、商売抜きでやっていることだけは確かだろう。

キャラバンサライ

昼前に秋葉原へ到着した彼は、歩行者天国の大通りを抜けて小さな電気商が軒を並べる路地へ入った。

まずAV機器のセカンドハウス店を覗き、めぼしい物がないと定番のジャンク屋を次々と見て回った。

1つの店では、国内ブランドの中国製モノラル・ラジカセが定価の92%OFFで展示されていた。

彼は路上に並べられた段ボール箱の中から1台を取り出すと、傷をつけないようにそっと蓋を開けてみた。

保証書や取扱いの説明書は抜かれていたが、新品特有の電子部品の匂いが彼の購買欲をそそった。

段ボール箱には控えめな表現で、「動作しないかも」と製品の品質を保証しない旨がフェルトペンで記されていた。

彼は最悪の場合自分で修理するつもりで、店内のレジへ向かった。

するとそれまで彼の様子を見ていた数人が、連られるように手に取りレジへ並んだ。

支払いを済ませ店を出ると、イラン人らしい2人連れが大きな声で話しながらラジカセを取り出し、ビニール袋を破いていた。

彼は諦め顔の店員の側をすり抜けるときに、「おやおや」と呟いて同情を示した。

駅へ戻る方向に1ブロック進むと、いかがわしそうな箱を積み上げたテキヤ風の露天商があった。

アイディア商品の店で売られるような置物を、横目で眺めながら足早に通り過ぎようとした彼は、ふと少年時代を思い出す懐かしさを覚えた。

フラッシュ・アートと書かれた、ガラス球の物体がテーブルに並べられていた。

彼は立ち止まり、しげしげと見とれた。

リストウォッチを確認すると、彼女との待ち合わせの時刻までに少し余裕があった。

彼は露天商の店員に声をかけると、テーブルに貼られたカタログを見ながら四角錐の上部が切りとられた台上に、直径20cm程のガラス球が乗ったデザインの物が欲しいと訴えた。

しかし隣に座っていた若い店員からは、昨日最後の1個が売り切れてもう在庫がないので、別のデザインのパーツを外してはどうかと言われた。

年嵩の店員は、そのような経緯を客に言ってもしょうがないと若い店員を嗜めた。

「明日か来週の土曜日にここへ来れば、このデザインは手に入りますか」

「いや、もう倉庫にも在庫がないからだめでしょう。それに我々はサラリーマンで、路上でこのように売るのは例外なんです」

店員は、すぐ近くにある事務所へ来てみないかと彼に尋ねた。

彼はすぐに了承して、その店員の後へ続いた。

連れて行かれたのは、電子部品のダンボール箱が無造作に置かれた、いかにも秋葉原らしい事

務所だった。

「ここに販売店から返品された展示品がありますが一応新品です、もしこれでよければお安くします」

取り出してくれたのは、先ほど彼がカタログ上で示したデザインの物だった。

「動作すれば買いますが、放電する以上寿命は数百時間ですか」

「ええ消耗品と考えて下さい、でも1日7時間の点灯で1年は大丈夫だと思いますよ」

店員はACアダプターをコンセントに差し込むと、2つ備わったボリュームの1つを回した。直径20cmのガラス球の中に4cm程の小さなガラス球があり、さらにその中には黒い塔のような電極が備わっていた。

店員がボリュームに連動したスイッチを入れると、キーンと高い発振音がして大小のガラス球間に赤いアーク放電が飛んだ。

ボリュームを調整すると10数本のアークがガラス球間をさまつた。

彼が手を外側のガラスに寄せると、球に分布する電位差から指先へアークが集中した。

高圧電流は、ガラス球間しか流れないので感電することはない。

彼は納得して購入する旨を伝え、価格を尋ねた。

店員が示したのは、新品価格から40%低いものだった。

先ほどの路上へ戻り少し傷んだ箱へ詰めてもらおうと、ポータブル扇風機と得体の知れない液体が入ったアイディア商品を、「おまけです」と言って手提げ袋へ入れてくれた。

待ち合わせのCOFFEEショップへ着くと、彼女は窓際のテーブル席でミルクティーを飲んでいた。

「待った？」

「10分くらいかしら」

彼が遅れた理由をかいつまんで話すと、彼女は子供みたいだと言って楽しそうに笑った。

窓から入る午後の日差しが彼女の薄いコーデュロイのシャツへ降り注ぎ、彼はとてもよく似合っていると思った。

「水曜日のバースデイは、何をしてたんだい」

「そうねえ、会社の友達とお食事してカラオケに行ったわ」

「楽しかったかい」

「いえ、やっぱり女性だけのお誕生会なんてつままない」

「僕は出張して箱崎まで行ったんだ、だから帰りに飯でもと思ったんだけど、先約があるって言うから今日にしたんだ」

彼女は、先日24才を迎えたばかりだった。

「今日は、横浜で妙子さんに会えるのかしら」

「うん、木曜日にはOKだって言ってたから大丈夫だろう、でも木、金、土の夜に電話を入れたんだけど全部留守電なんだ」

「心配ね」

「3時に桜木町って言うておいたからもうすぐ自宅を出る頃だろうね、じゃあ確認の電話を入れて見よう」

彼が店の出入口に設置された電話専用のスペースへ行くと、カードの使用できない電話機しか

なかった。

ハンドセットを取ると、市外を考慮して5枚のコインを投入した。

遠い呼び出し音が3度ほど続いて相手が出ると、回線のルートが切り替わったのか突然大きな声で彼女の声がした。

「もしもし」

「やあ、寺尾です」

「ああよかった、今日はだめなのよ」

「そうか、残念だね」

「どうやって連絡しようかと悩んだわ、ところで優子さんはいるの」

「うん、今日は小田君も荒井君も都合が悪くて、君に会いたがっていたけどね」

「ごめんなさいって言うておいて」

「うん、わかった」

彼は誕生日のプレゼントに、彼女を横浜まで連れて行く約束をしていた。

そして彼の友人達と食事する予定でいたが、親しい何人かは横浜を離れる予定が入っており彼女だけが頼りだった。

二人は、東京駅で東海道線へ乗り換えた。

休日の午後早い時間帯からか下り電車はすいており、その車両は川崎まで二人しか乗っていなかった。

「車の買替えはどうするんだい」

「それが、親戚から頂いたあの車は返しちゃったの」

「へえ、何かしでかしたんだろう」

「荒川沿いの土手に駐車出来なくて、前の持ち主の駐車場の前に1週間くらい置いていたら邪魔になって警察まで出てきたの」

「凄いな、それは事件だ」

彼は大きさに驚いてみせた。

「で、前の持ち主からは怒られただろう」

「お母さんの知り合いだから謝ってもらったんだけど、妹とお母さんからひどく叱られたわ、もう家族には呆れられたみたい」

彼は一頻り笑った後で、「君らしい」と言った。

「そうなの、最近是我的結婚相手が家に来たら”本当にうちの娘でいいんですか”と確認をしなくちゃいけないってみんなに言われるの」

「そうだね、僕も君に会って半年くらいは呆れていたものなあ」

「まあ、ひどい」

「いいじゃないか、その結婚相手とやらもすぐに馴れるさ」

彼は、怒った彼女を楽しそうに見ながらフォローにならない言い訳をした。

川崎を出て新子安を過ぎるあたりから雨になった。

「東京は晴れていたのに、予報通りだね」

「すぐに止むんでしょう」

「うん、20%程度らしいからね」

横浜駅で京浜東北線に乗り換えた2人は、隣の桜木町で降りると駅ビルとも言えるピオシテイ

一へ入り女性用の傘を1本買った。

「はい、これもプレゼント」

「それじゃあ悪いわ、男性用を買って持って帰られたらどうですか」

「うん、でも本当に買いたい傘を探すには時間がかかるから、とりあえず君が使える傘にしよう」

桜木町の駅を海側へ抜けると、2人は動く歩道に乗って日本丸の係留された場所まで出た。雨はまだ、1本の傘で間に合わない降りだった。

「僕の緊急用の傘も出そう」

「あら、持っていたんですか」

「うん、15年前に買ったものなんだ」

彼が古い3段の折り畳み傘をさし、2人は横浜博の跡地を海側へ歩き始めた。

跡地は港未来21として高層ホテルや国際会議場が建設され、横浜博の名残は美術館とコスモクロックと呼ばれる大観覧車に併設された、いくつかの乗り物だけだった。

全ての乗り物は、雨にもかかわらず動いていた。

コスモクロックには約30人近い列が出来ており、カップルが多いせいか乗り込むまでに10分ほど待たされた。

コスモクロックは、ちょうど15分かけて1周回る。

「あのホテルは、横浜らしい形をしていますね」

「うん、素敵だね」

「あそこが赤煉瓦ですか」

「そうなんだ、2度ほど撮影会をやったよ」

「へえ、面白そうですね、自由に入れるんですか」

「あそこは税関の中だから、入るときにあの橋の入口で携帯している輸入品のリストを書かされたよ、今でもやっているかなあ」

観覧車を降りて日本丸まで歩くと、傘をたためる程度にまで雨の降りが小さくなった。

彼は、予定通りメモリアルパークに併設されたVIEW21レストランまで彼女を連れて行ったが、披露宴の2次会らしい宴会席にほとんどを予約され、入ることが出来なかった。

2人は桜木町駅の構内に設けられたCOFFEEショップで休憩すると、電車で横浜駅へ戻った。

「フラッシュ・アートの紙袋が結構濡れちゃったな」

「どうしましょうか」

「何か買物をして、さっき見かけた”そごう”の大きな紙袋をもらおう」

「そうですね」

エスカレーターで6階まで上がると、彼がパスケースを購入し店員に頼んで大きな紙袋を分けてもらった。

「これからシーバスで山下公園まで行き、夕食だ」

「ええ、何処から乗るんですか」

「ちょうどこの”そごう”の裏から出ているんだ、何でも食べられるかい」

「大丈夫ですよ」

「じゃあ、昔君だけ行けなかった、トルコ料理にしよう」

「橋本さんの歓迎会をやった店ですよ」

2人は、2階に設けられたシーバス専用連絡口から乗り場へ出ると、18時40分のマリンシャトルに乗船した。

シャトルは、20分間隔で運行しているようだった。

山下公園の中央口から中華街の方向へ出ると、幌をかぶりシルバーのアルミドアを輝やかせた車が交差点に停車していた。

「窮屈そうですね」

「うん2人乗りだからね、それにこいつは、元々はレーシングカーなんだ」

「なんて言う車ですか」

彼は横断歩道を渡りながら、ボンネットのエンブレムを確認した。

「ロータスのセブンて言うんだけど、こいつはケーターハム社のライセンス生産でスーパーセブンだね」

「こういうのは、あまり好きじゃないわ」

「げっ、僕はRX-7よりこっちのセブンの方が好きなんだ、中古で300万程度だから、いつか買いたいね」

「この車はやめましょうよ」

「そうかい、ところで優子はどんな車を買うつもりなんだい」

「外車で左ハンドル」

「じゃあ価格からゴルフだな」

「あれも嫌いだし、ローバーのミニも嫌い」

「国産だと、ほらここに駐車している車はどうかい」

「最近のトレンドでこの車も丸っこいですね、でも嫌い」

彼は中古車雑誌を見て、彼女の選択にアドバイスをする約束をしていた。

山下公園から2ブロック離れた路地を歩き、目的の店に到着した。

「ここがトルコ料理の店キャラバンサライって言うんだ、日本語で商隊宿かな」

「へえ、面白そうですね」

店内には、トルコに関係ありそうな日用雑貨がテーブルに並べられていた。

2人は、標準的なコース料理とトルコ産の蒸留酒を1杯だけオーダーした。

彼が彼女と食事をするのは、この日で4回目だった。

約3年半の付き合いでは少ない方だと思っていたが、なんとなく2人で出かける機会がなく、無理のない付き合いだと思っていた。

氷の入ったポットと1/10程蒸留酒が入ったグラスが運ばれた。

老店主は、黙ってテーブルに置くと静かに戻って行った。

「きっとこのアイスウォーターをグラスに入れるんだな」

「飲んだ事あるんですか」

「ない、このままちょっと口をつけて、アルコールの強さを試してくれないか」

彼女がそっと舌先に乗せるように含んだ。

「うわっ、強い」

「じゃあ、やっぱり水で割ろう」

彼がグラスに水を注ぐと、トルコ産の蒸留酒は少し白く濁った。

「今度はどうだい」

「これでも少し強いですね、寺尾さんも飲んでみなさいよ」

「どれどれ」

彼女の真似をしてほんの少し舌先にころがすと、強い焼酎に香辛料を入れたような味がした。

「うん、独特の香りがするね、飲めるだけ飲んで残しなよ」

店には彼女達以外に数組の客が入り、彼が思っていた以上に繁盛しているようだった。

「はいこれがプレゼント、お誕生日おめでとう」

「どうもありがとうございます、ところで開けてもいいですか」

「どうぞ、遠慮なく」

「これは時計ですか？」

「そうなんだ、ウェザーリポート付きトーキングクロックだな」

「寺尾さんらしい」

「そうだ怒られる前に言っとかなくちゃ、優子は英会話科だったよね」

「そうですよ、でももうだめ」

「しっかり勉強しろ、取扱い説明書もそうだけど天気予報も時刻も英語で知らせるんだ、そいつは」

「どうしよう、辞書は妹にあげちゃったのに」

”どうしよう”は、彼女特有のいつもの甘い口調だった。

外へ出ると天候は冬型の気圧配置に変わり、空はすっかり晴れていた。

「風が強いな、寒くないかい？」

「大丈夫」

「そうか、さっきセーターを着たんだ」

「ええ」

2人は大さん橋入口から県庁前へ出て、日本大通りの銀杏並木をスタジアム方向へ歩いた。

このコースは、彼の最も好きな道順だった。

「昔、この通りをある女性と歩いたんだけど、その人から”ここで腕を組んで一緒に歩きたかった人がいる”と突然言われたんだ」

「その相手の人は、寺尾さんだったんですか」

「いや、僕じゃあない」

「それじゃあ、寺尾さんが腕を組んで歩いてあげましたか」

「出来なかったね、自分に余裕がなかったのかな、言い出せなかったよ」

数m程歩いて、彼が言った。

「優子、僕と腕を組んで歩いてくれないか」

「いいですよ」

彼女は、荷物を左手に持ちかえると躊躇わずに彼の左腕を取った。

彼は彼女の優しさと、彼の袖を持つ遠慮がちな腕の組み方に感心した。

そしてこの女性の本当の大切さが、このように表現された意外性に驚いた。

恋に恋して

序章

彼は、8階から乗ったエレベーターを5階で降りると足早に自席へ向かった。廊下を急ぐ彼は、すぐに一人の女性に追い付いた。

追い越そうとして何気なく足元を見た彼は、女性にしては珍しく鍛えられた脹ら脛に目をとめた。

彼にはスポーツによるものとはわかったが、それがどのジャンルのものかは想像がつかなかった。

また考える間もなく、色気ともいえるその発散する雰囲気に見とれていた。

数日後、忙しい彼のアシスタントの応援として、彼女に会うことが出来た。

馴れない業務のせい、定時近くになると彼女の疲労を十分に読みとることが出来た。

一区切りついた彼女が、彼に与えられた作業用の部屋で疲れを訴え、書棚に寄りかかった。

うつ向きかげんに彼を見る彼女の表情は、何故か愁いを含んでいるようだった。

本章

2枚のカーテンをくぐり抜けた微かな日差しが5月の連休にふさわしく、穏やかに彼を目覚めさせた。

彼は、キッチンの蛇口を開けると流れ落ちる水道水をそのままに、クロワッサンを2つトースターへ放り込んだ。

続けてタイマーを60秒にセットするとケトルへ水を注ぎ、ガスレンジへかけた。

お湯が沸き丁度2杯分のCOFFEEを抽出し終わると、冷蔵庫の野菜室からペリカンマンゴを1つ取り出して、食卓の上へ並べた。

彼は、フォークとナイフで器用に皮を剥き取り、黄色くて少し大きめの鶏卵のようなペリカンマンゴを味わった。

よく熟してはいたが、ほんの少し夏の青臭さを覚えた。

簡単で且つ十分な朝食を終えた彼は、地下のガレージから車を出し表の道路上で洗車に取り掛かった。

数日前のほんの僅かな雨天走行で汚れたボディーは、市販のカーシャンプーですっきりと輝きを取り戻した。

彼がシャツの袖をまくりスクイジーでボディーを拭いている間に、5月の心地よい風が彼の拭き残した水滴を乾かしてくれた。

ドアウィンドウを仕上げている彼は、インパネ上の時計を確認すると洗車を切り上げて、写真撮影の準備を始めた。

今日は、彼女を口説いて、写真を撮る約束をしていた。

彼は、待ち合わせの私鉄駅に約15分程早く到着した。

駅前のロータリーには、タクシー用と一般の送迎用カースペースがそれぞれ2台分あった。彼は、ロータリーを右回りにゆっくりと1周すると、運良く空いたそのスペースへ車を入れることが出来た。

既に日差しは十分に強く、咽の渴きを覚えた。

エアコンを入れようかと少し迷った彼は、エンジンを切ると助手席のウィンドウを少し開けて車から出た。

駅舎のはずれまで歩くと、値上げしたばかりの販売機から炭酸飲料を探し、ダイエットコーラを選んだ。

彼の好きなコーラではなかったが、新しい製品であることに興味を持った。

歩道の植木を囲むように造られたベンチへ座ると、下りの電車が到着し数人の乗客が降りて来た。

都内から丁度1時間を要する駅らしく、降客の多くはのどかな雰囲気の中を人待ちの車やタクシーに乗って次々と去って行った。

数人の女性が辺りを慎重に見渡すと、並木の陰や幾つかのベンチへ散った。

彼女達の服装は、スプリングコートやミニスカートとこの季節特有の難しさを表わしていた。

缶コーラが半分になる頃、次の下り電車が到着し改札を出て来た彼女が手を振って合図した。

「お待たせ」

「やあ、何処か行きたい所はあるかい」

「おまかせするわ」

「じゃあ、とりあえず地図でも見よう」

「あら、随分若い車ね」

「うん、格好だけのクーペだよ」

彼の車に乗り込んだ二人は、観光雑誌を参考に秩父へ向かうことに決めた。

しかし、407号線から日高-川越線へ入ると、車はほとんど進まなくなった。

「これはきっと、日高陸橋の先まで続いているよ」

「そうかもしれないわね」

「青梅辺りへ変更しようか」

「それもいいわね」

「じゃあ、Uターンして飯能へ向かおう」

飯能の市街へ入ると、そこでも渋滞に巻き込まれた。

二人は更に予定を変更して、天覧山の南麓にある寺へ向かった。

「敏夫さんは、このようなJAZZが好きなの」

カーオーディオからは、ラリー・カールトンのフュージョンギターが流れていた。

「うん、これはまあまあかな、君はどんなジャンルが好みだい」

「あまり本格的なものは聴かないの、よく知らないと言うか」

「じゃあ、どの楽器が好きなんだい」

「サクソスがいいわ」

「そうか、今日持ってきたテープでは、これがいいかな」

彼がナジーをかけると、彼女はスローなバラードに興味をみせた。

「フュージョンでいいかな、こってこてのJAZZもあるけど」

「こってこって？」

「フォービート」

彼は今一步彼女の好みを把握しきれないでいた。

寺へ到着すると、連休にもかかわらず駐車場は空いていた。

彼は、ハッチバックのトランクルームからモータードライブを装着したニコンのF3を取り出し、高感度タイプのリバーサルフィルムを詰めた。

さらにバストショットで撮影するためにショートズームを取り付けた。

フィルムは、リバーサルタイプとモノクロームを各々3本、予備にネガタイプのカラーフィルムを1本用意していた。

彼はまだ慣れずに表情の硬い彼女を、駐車場入口のつつじの植え込みへ立たせ数ショット撮影した。

左手でレフ板をあてながら重量2kgを超えるカメラを構えることができるのは、彼にとって撮影開始後のほんのわずかな時間だけ可能だった。

参道に並ぶ、大きな石灯籠のパースペクティブを利用して数ショット、木漏れ日を背景に数ショット撮影した。

空模様は目まぐるしく晴れと曇りを繰り返し、レフ板を使えないときはスピードライトをTTL調光で使用した。

境内の樹木は丁寧に整えられ、鎌倉のように観光ずれしていない様子は、二人に驚きを与えた。

彼は3本のリバーサルフィルムを撮り終えてから、昼食を提案した。

時間は既に午後2時を過ぎており、食後の撮影は近くの聖天院で行うことになった。

二人は紳士服の専門店で併設されたファミリーレストラン系列の店へ入ると、遅くなった昼食をオーダーした。

「食べ物の好みは？」

「好き嫌いはないけど、あまりかしこまって食べるのは好きじゃないわ」

「じゃあ、フランス料理は嫌いかい？」

「ええ、どちらかと言うとてんぷらや寿司がいいわね」

彼は自分の好みと異なることを、少し残念に思った。

支払いを済ませ表へ出ると、風が強くなっていた。

県道へ入った二人は、再度渋滞に出会いゆっくりと目的地へ進んで行った。

「敏夫さんはどんなオートバイに乗っているの？」

「YAMAHAの250ccだけど、どうしてだい」

「昔、憧れていた人がGP-Zに乗っていたの」

「あれはベストセラーだったね」

「私もSUZUKIの刀に乗りたくて」

「ほう、で免許を取る努力はしたのかい？」

「親に反対されて」

「じゃあ、彼の後ろへ乗っけてもらったかい？」

「いいえ、彼と言っても一方的に想っていただけだから」

「そうかい、じゃあ今度乗せてあげよう、きっと人生観が変わるよ、所でどうして刀に乗り

たかったんだい？」

「月並みだけど、若かったのかしら」

「そうだね、多感な年頃だったんだね、でもオートバイに10年乗ると1度は大きな事故にあうよ」

「あら、何かあったの」

「こいつが3年前の事故で縫った跡」

彼が右腕の袖をまくって約8cmの傷跡を見せると、彼女が珍しそうに触った。

彼は、くすぐったさと同時に、不思議な感触を覚えた。

聖天院へ着いた二人は、三脚を使用して記念撮影を行うことにした。

自分で現像するためにモノクロームフィルムを詰めようとしていた彼は、彼女の”新芽が綺麗”という呟きにネガカラーへ切り換えた。

ここも先ほどの寺に劣らず庭が十分に手入れされ、とても気持ち良かった。

特に庭石が高低差を利用して効果的に配置され、彼は庭師の意図するパースペクティブを不思議なほど感じ取ることが出来た。

記念撮影を終えると壁の無い休憩用の建物まで下り、アップを多用してベンチに寄りかかる彼女を撮った。

時折吹く風は、彼女の髪を心地よくかきあげると同時に彼の心をくすぐった。

彼女の笑顔もいい、しかし悲しそうで愁いのある瞳がさらにいい。

このフィルムを撮り終わると、彼女は彼の家を訪問することになっていた。

彼は、カメラのフィルムカウンターが残り枚数を1つ1つ減らしていく都度、自分の変化して行く気持ちに気付いていた。

今日誕生日をむかえ、多感であった時代からさらに遠ざかる自分を覚え、恋に恋してしまいたい衝動を、そっとフィルムへ焼き付けられたらと思った。

終章

数日後、彼は現像から上がったスライドを、自宅でビデオ信号に変換する機械へかけていた。カラーバランスを補正された彼女の表情が、次々と29インチのテレビ画面へ映し出され、彼は1コマを約10秒間かけてビデオテープへ記録していった。

映像は、先日の時間軸に忠実に並べられ約15分のストーリーとなった。

彼は、次にカセットデッキをVTRへ接続し、昨日作成しておいたBGMテープをアフレコした。

すべてを終了すると、最初から最後までを一通り観賞した。

BGMの音質以外は、十分に納得出来るものだった。

さらに彼は、もう一度最初から最後までを見た。

彼女の表情には、彼と1日を経過する過程の中で、彼の気持ちがほんの少し彼女の心へ届いた様子を映していた。

僕は片岡義男じゃない

僕は、雑文と自称している小説を、愛読者へ渡している。
愛読者の多くは女性だ。
長年読み続けてくれる女性もいれば、最近出会った人もいる。
場合によっては愛読者が登場することもある。
雑文の感想を述べてくれるのは、2割にも満たない。
勿論、御世辞で誉めてくれる人は多い。
自分が登場する雑文にのみ感心を示す人もいる。
でもみんな好きだ。

雑文を読んだ女性の中で、僕の作品を片岡義男風と評する人が数人いた。
その様な場合は、“うん僕の先生だよ”とか“彼の作品を読むと僕にも書ける気がして”と答えることにしている。
では、何処が片岡風なのだろうか？
それを検証しながら、何故雑文を書くか探ってみよう。

検証1. 彼は古いライダーである。
彼の小説には、旧メグロ、現川崎のW1が何度か登場する。
それ以外には、あまりめぼしいオートバイは登場しない。
彼のほとんどの文庫本を読んでも書いていなかったのが正確とは言えないが、きっと免許は普通車のおまけだろう。
僕は中型ではあるが、れっきとした試験場1発組である。
勿論、初回の実技試験で合格した。

検証2. 彼は写真の心得がある。
彼の小説には、スライドをライトボックスの上で見る描写が何度か出て来る。
登場するカメラは、ミノックスとおぼしきものと小型ライカらしいものもある。
僕はニコン党である。

検証3. 彼は女性に優しい
彼の小説は、女性を騙すシーケンスが非常に旨い。
僕が一番気に入っているのは、彼女と避暑地で待ち合わせ、ついに彼女の休暇中に到着を間に合わせなかった“缶ビールのロマンス”が一番好きだ。
僕は缶ビールも嫌いだが、そのように女性を待たせることが先ず出来ない。
自分に優しさの余裕がないと言ってもよい。
僕には、女性を騙す優しさがないということだ。

検証3. 彼は銃に詳しい
彼の小説には、米軍の制式突撃銃であるM16-A1が詳細にわたり書かれている。

僕より詳しいのは、その銃を主人公である女性が組み立てている描写でよくわかる。
しかし、僕が雑文の中にM16-A1を登場させたのは、彼より2年早い。

検証4. 彼はCOFFEEが好きだ

彼の小説には、COFFEEが重要な役割をはたす、つまり登場人物の背景描写に使われる。
それも何故かエスプレッソが多く登場する。

僕は小学生の高学年からサイフォンでCOFFEEを抽出して飲んでいる。

最近はパーコレーターで飲むことが多い。

エスプレッソは器具を4種類も持っているが、あのような描写に使うことが出来ない。

COFFEEは、自分の世界に浸るための道具である。

検証5. 彼はカタカナが好きだ

彼の両親の一方が日系人であり、彼もハワイで多くを過ごしたせいか、小説の中にカタカナが多い。

僕の雑文にもカタカナが多い。

しかし僕の場合は、専門用語のカタカナである。

英語のカタカナではない。

検証6. 彼はプレスリーがお気に入り

僕はプレスリーが大嫌いである。

だから彼の文庫本で買っていないのは、一番最初のプレスリーのものだけだ。

検証7. 彼はアメリカ人になりたい

彼は2冊ほど訳本を出している。

アメリカの私立探偵の活躍だ。

活躍と言ってもアメリカンTVの乗りではなく、淡々とした物語だ。

とてもいい物語だ。

この本は誰にも教えたくない。

一つ言えるのは、彼はその探偵の背景が好きだが、僕はその探偵の考え方が好きだ。

検証8. 彼は強い女性が好きだ

彼の小説には、男性から自立した強い女性が多く登場する。

きっと好きなんだ。

僕は、そうなりたいとじたばたしている女性が好きだ。

最近またそういう女性を見つけた。

僕の愛読者にしてしまいたい。

検証9. 彼はカントリーソングが好きだ

彼の小説に登場する巡業中のカントリーシンガーは、驚くほど描写が決まっている。

だが僕は、カントリーソングそれもトーチソングが大嫌いだ。

音楽はJAZZに限る。

検証10. 彼の景色

いい音楽、それもJAZZを聴いていると景色が見える。

彼の小説を読んでいると、同じように景色が見える。

さて検証結果のまとめであるが、素敵な女性達と付き合っていると、彼女達の背景が見え始め、彼女達の生きざまが景色になって見える。

そうすると、彼女達が登場する雑文に僕の景色を織り込んで彼女達に渡す。

きっと僕から見た景色が、さらに彼女達の生き方をふくらませてくれると願って。えっ？ 結果が主題と違うって？

そんなことはどうでもいいさ、僕は僕、彼は彼、君は君さ。

君は素敵に堕ちて欲しい

雨の土曜日、ちょうど17時に仕事を切り上げた彼は、彼女を自宅まで送ることになった。今日の彼女は、彼の業務を仕上げるために、アシスタントとして休日出勤をつき合っていた。彼は、無断で使用していた来客用の駐車場から車を出すと、路肩に止めて道路地図を取り出した。

「さて、何処を通過して帰ろうか」

「そうねえ、寺尾さんにお任せするわ」

「関越、もしくは254に出たら北上かな」

「254にしましょう、わたし道を知っているから」

「じゃあそうするか、どこかで夕飯をご馳走しよう」

「いいわね、うれしい」

浦和一所沢バイパスを越えると、254号線通称川越街道は確実に混み始めた。

「ねえ、何処かドライブしない」

「おやすい御用だけど、景色のいい所でもこの近辺にあったかな」

「景色だったら正丸峠ね、でも今からじゃあ真っ暗だわ」

「おいおい、適格に指示を出してくれよ、何処にでも連れて行ってあげるから」

「じゃあこの先で左折しましょう、所沢方面に向かうと一面のお茶畑があるわ」 彼の車は、彼女の希望で所沢市街を抜けると狭山湖、多摩湖を通過し日光街道を越えて16号へ入った。彼は、彼女のドライブの目的が今一步つかめないでいたが、彼女との適度に軟らかい会話は、休日出勤のアフター5に似合っているかもしれないと思った。

先ほどからの話題は、彼の女性の好みについてだった。

彼女は、「面白い話を聞かせて」とせがみながら巧みに彼の過去を聞き出していた。

「どのような女性が好みかしら？」

「ポリシーのある人」

「例えば？」

「生きる上での自分の主張を貫ける人」

「主張って？」

「例えば結婚している女性がいて、自分の夢を実現させるためには夫をしばらく 放り出すことも出来る人」

「それは少しひどいんじゃないかしら」

「結婚っていうのは、お互いの夢を実現させるために助け合うことだよ。だから 夫婦は協力して生活して行くだけじゃあない。」

「夢ねえ」

と、彼女がため息まじりに呟いた。

「夢と言っても絵空事じゃあなくて、自分の生き方さ。但し、性別や年齢を経る ことでも次第に変わるけどね」

「寺尾さんの夢は？」

「最近までは、典型的なサラリーマンさ。例えば20代でマンションを40代で 一戸建てを」

「じゃあ今は違うの」

「少し変わったね。造り上げて来たものを壊すと言うか、自分が堕ちていく姿を 夢みるよ」

「おちるって？」

「墮落さ。プライドを捨て去ると言い替えてもいいね」

「プライドね、わかるような気もするわ」

「うん、でも墮ちるの意味あいにはプライドだけじゃあない。嗚は少し逸れるけど、 君は結婚相手にどんな人を選ぶかい？」

「優しい人」

「月並みだな」

彼は突き放すように言うと、最近他の女性と交わした同様な会話を思い出していた。

「僕の昔の考え方では、その相手と何cmまで近づけるかが判断のポイントだった。つまり0cmになったときが結婚対象さ。今はその相手のために、自分が 何処まで墮ちることが出来るかに変わったよ」

彼は、嗚が少し複雑になり過ぎたことを心配した。

16号へ入った二人は、空腹を覚えた。

時刻は既に19時を過ぎ、6月に近いとはいえ日は落ちていた。

「何を食べようか」

「何でも食べられるわよ、私は好き嫌いが無いの」

「そうか、じゃあ走ってよさそうな店を見つけたら言ってくれよ」

「それじゃあ狭山で左折して、新しくできた店に行きましょう」

「おやすい御用で」

二人は複雑な県道に迷いながらも、彼女の希望通りに到着した。

店は牧場に併設されたレストランで、まともな服装を要求しているような構えだった。

「こりゃあだめだな、今日はジーンズにこんなシャツだぜ」

「そうねえ、この前来たときは、そんな風に見えなかったんだけど」

二人は、彼の提案で数キロ離れた別の店へ向かった。

牧場から10分もかからずに到着したが、看板の灯が消えていた。

「ここもだめだ、もっと早く食事にすればよかったね」

「あら、この奥にも店があるわよ」

駐車場のさらに向こう側に、暖簾の下がった店があった。

「メニューを覗いて来てくれないかい、よかったら入口からOKのサインを出してくれよ」

「ええいいわ」

彼はすぐに車の向きを変えられるように、フロントから駐車スペースへ入った。

彼女は自分の好みだけで決めてしまうのをためらったのか、サインを出さずに戻ってきた。

「私は大丈夫だけど、釜飯のようなものばかりだったわ」

「よし、じゃあ此処にしよう」

彼は、この近辺でこれ以上遅くなると開いている店がないと判断した。

暖簾をくぐって自動ドアを開けると、テーブル席にするか座敷にするかを尋ねられた。

彼女は、迷わずテーブル席を選択した。

店は、焼鳥屋が鳥料理の専門店に格上げされたような不思議な雰囲気だった。

しかしちょうどデッドな時間帯からなのか、店内には二組の客しかいなかった。

彼女は鳥釜飯とハイネケンを、彼は鳥重と焼鳥を注文した。
先ず、グリーンの鮮やかな小瓶と同色のグラスが彼女の前に運ばれた。
彼が1杯目をついだ。
彼女が1口分飲むと、彼がつぎ足した。
グリーングラスに残った口紅が白い泡に染えて美しいコントラストを見せていた。
彼はタングステン照明にとっても合うこの色彩を、写真に撮りたくなった。
「ねえ、もっと面白い噺を聴かせて」
彼女が甘い口調で彼を煽る。
「えっ、もう酔ったのか」
彼が時間稼ぎをしながら続ける。
「じゃあ質問をどうぞ、何でも答えてやるよ」
「寺尾さん、今まで浮気は一度でもなされた？」
「知らねえ」
「いま、何でも答えると言ったじゃあない」
「そうだっけ」
「ずるい、言ったわよ」
彼は、彼女の意図を図りかねていた。
いまは、彼女に対して正直である時期か、または気の効いた返答をするべきかを躊躇した。
更にこの質問には、いくつかの問題点があった。
彼女との現状の関係では、ないと言えれば疑いが残る。
あると答えれば、格好をつけているようにも取れる。
彼は返答に曖昧さを含め、次の彼女の出方を待つことにした。
「あるよ、でもそれ以上は答えられない」
「精神的な浮気じゃあなくてよ」
「ああ」
「ねえ、何人と？」
彼は予想通りの質問に、予防線を張っておいてよかったと思った。
「だめだ、それ以上は言わないと言っただろう」
彼女の質問が行き着くところまで続くと確信した彼は、防御の姿勢を見せた。
しかし、彼女は押しの強さで続けた。
「じゃあ、何回かしら？」
「知らねえ」
彼は、笑いながらも語気を強く答えた。
そして、涼しい目をしながらこのような質問が出来る彼女を、とても面白いと感じた。
進んだOLの適度な色気を含んだ雰囲気だけでは、彼もここまで言わせない。
彼は、"君と堕ちたい"という本音をどの様に表現するか迷った。
そして、次回へ持ち越した。
彼女を口説くには、もっと別なシチュエーションと過程が必要だと判断した。
仕事の帰りに、焼鳥屋では何となくつまらない。
ラフな付き合いもいい、でも自分が気に入った彼女とは、もっと"いい女"として続けたい。

店を出ると駐車場には霧が漂っていた。

彼は県道を迂回すると、ほんの少し遠回りの道を選んだ。

雑木林の間から、ときおり霧が車をかすめて去った。

彼女がウィンドウを少し下げ、気持ちよさそうに小声で歌い始めた。

彼は、彼女が素敵に堕ちて欲しいと思った。

僕に貸してごらん

私鉄の支線終着駅に到着した彼は、本線のホームへ移動するために高架になった陸橋を渡った。

陸橋の上り階段でカセットプレーヤーの電池が消耗したらしく、フュージョンばかりを録音していたテープが停止した。

左手にフライトバッグ、右手に傘を持っていた彼は、そのまま歩き続けて1番線のホームへ降りた。

幾日か晴れが続き梅雨もそろそろ折り返す気配を見せていたが、今朝は時雨のような小雨が降り続き、時折強く吹く風は、ホームの白線近くまで雨痕を黒く印していた。

彼は白線の少し手前に立つとバッグを股に挟み込み、左の尻ポケットからカセットプレーヤーを抜き出した。

続けてジャケットの右ポケットからスペアのガム電池を取り出し、素早く交換を済ませた。

プレイボタンを押したままのプレーヤーは、突然回転を始めると元気良く続きを奏でた。

カセットプレーヤーを再びポケットへ仕舞いバッグを抱えなおすと、上りの急行電車がホームへ入ってきた。

降客が全員降りるまで白線よりやや下がっていた彼は、後ろの乗客に押される直前に素早く乗り込み、入口より2番目の座席の前へ立った。

1時間程遅いフレックス通勤しているにもかかわらず、ほとんどの吊革がこの駅でふさがった。

バッグを網棚に上げ吊革を握ると、彼は前に座る女性の仕草が異様な状態であることに気が付いた。

彼女は、膝の上に巾着の形をした大きな革製のバッグを乗せていた。

目の高さまで持ち上げたカセットプレーヤーは蓋が開き、ハーフの小窓からは、わかめのようにくしゃくしゃになったテープがプレーヤーのピンチローラー辺りまでのびていた。

彼女は、ちぢれたテープを少しプレーヤーから引き出すと、ハーフの穴に指を入れては巻取る行為を繰り返していた。

何度目かに巻き付いたテープを引き出せなくなると、左手に持ったハーフを所在なげに降ろし、大きなため息を1つついた。

彼女の服装は、グレイのニットセーターに紺のジャケット、スカートは若草色の花模様が描かれていた。

「僕に貸してごらん」

彼は、心の衝動を押さえきれずに声をかけた。

彼女は上目遣いに彼の方を見ると、両手でプレーヤーとカセットハーフを差し出した。

彼は、「失礼」とぶっきらぼうに一声かけると、プレーヤーからヘッドホンのプラグを抜き取って彼女の膝の上に落とした。

プレーヤーを調べると、フォワード側のキャプスタンにテープが重なって巻き付いていた。

彼は、駆動機構がベルトで連動したデュアルキャプスタンドライブであることを祈って、もう一方のキャプスタンを手で逆方向に回した。

好運にもフォワード側が連動して回り、テープが少し解けた。

彼は、カセットテープを彼女に渡すと、先ほどの彼女の真似をして指でたるんだテープを巻き取る動作をして見せた。

彼女は、すぐに彼の意図を理解して巻き始めた。

彼は、彼女のスピードに合わせてキャプスタンを徐々に回した。

程なくテープが外れると、プレーヤーを巾着バッグの上に置いた。

この作業の間に、1駅が過ぎていた。

彼女は、最後のたるみを巻き取っていた。

彼は、バッグの上から再びプレーヤーを手にとると、ピンチローラーの汚れ具合を見た。

あまりひどく汚れていないことを確認すると、自分のプレーヤーからテープを抜き出して彼女のプレーヤーに装着した。

彼女の耳からさがったままのヘッドホンを差し込むと、再生ボタンを押してから音量を少し上げた。

彼女は、こくりとうなづくと彼に微笑んだ。

SPEAK LOW

彼は同姓の友人といっしょに退社し、ほぼ約束の時間に池袋駅へ到着した。私鉄のホームから地下街へ通じる改札口を出ると、地下鉄の出口と合流する柱の前へ立った。

「来るかなあ」

「何が」

「時間にだよ」

「まあ無理だろうな」

「約束は6時15分だろう」

「ああ」

「本社の定時は、たしか5時35分だったよな」

「よく知らない。しかし、待ち合わせは6時10分でもいいって言ってたぞ」

「それじゃあぎりぎりだよ」

「ところでさあ、15分というのはいいだろう」

「何が？」

「これが6時丁度に待ち合わせなんてことになると、ここいらは川越の芋アイス だぜ」

30分遅れて来た彼女と合流した3人は、複雑な地下街の経路をたどり西部デパートのロフトへ急いだ。

「これがMONOマガジンで1等賞だった、プロテックスの鞆だよ」

うんちくを傾けようとする、2人は別の話題で忙しそうだった。

彼は少しがっかりして、近くにいた女性の店員を呼んだ。

「このA4サイズの厚手タイプは、いくらでしょうか？」

「あら、書いていないわ。少々お待ち下さい」

店員は、売り場の隅に設けられたラッピング用の作業机まで行き価格を確認してくれた。

「19800円でございます」

「カラーはこれ以外に何がありますか？」

色については、すぐに返事が返ってきた。

「このダークグレイとあとはライトグレイにブラックがあります」

しばらく見比べて悩んでいると、店内放送があと5分で閉店になることを告げた。

彼は時間内に結論を出せば失敗すると判断し、再度1人で出直すことを決めた。

「すみません、顔洗ってまた出直してきます」

売り場の女性はくすりと笑ってキャッシャーの方へ去った。

2人は、西口公園の前で彼の友人と分かれた。

彼が予約したレストランは、雑誌に掲載されていた地図によると歩いて5分以内の場所だった。

池袋に詳しい筈の友人が示してくれた方角は、彼にとって90度回っているように思えたが、とりあえず従ってみることに決めた。

彼は地図上の芸術文化会館を頼りに、迂回するように彼女を連れて進んだ。

「自動車学校の調子はどうだい？」

「もう3段階なんです」

「おやっ、結構早いんだね」
「今の所ストレートなんですよ」
「教官の予約はうまくいっているかい？」
「最近は何回違うんです、合格するまで請負性なんて言っていて」
「じゃあ苦労しているだろう」
「でも教官は優しいんです。”スニーカーを履いてきてくれたら合格をあげる”なんて言うの」
彼女は、得意とする愛敬でうまく教習を切り抜けているようだった。

「やはりこの方角ではたどり着けない」
彼は呟くように言った。
2人は、すでに3ブロック程をクランクのように歩いていた。
「どうしましょうか」
「店に電話をかけて聞きたいんだけど、ここで確かめてみよう」
彼は、受付らしき場所に数人の男性がいる”防災センター”のビルへ入った。
店のコピーを見せると、消防士のような服装をした係官が対応してくれた。
係官はコピーのプアな地図を無視して、住所を頼りに調べ始めた。
しばらくすると、壁に貼ってあった大きな地図を示し2ブロック戻るように教えてくれた。
指示されたビルの角へ行くと、目的の店はすぐに見つかった。
既に予約時間には、20分程遅れていた。

店内は、手前のパーティー席と奥のテーブル席に2分され、2人は奥の4人がけの席へ案内された。

メニューを渡されると、彼女に尋ねた。
「最近は、飲兵衛になったんだよな」
「そうでもないですよ」
「グラスワイン1杯じゃあ不足だろう」
「そうですね」
「おや、この店は結構本格的だな、食前酒が幾つも取り揃えているけど、ワインでいいかい」
「ええ、おまかせします」
彼は電話で予約していた日替りのコースに、シャブリのハーフボトルを頼んだ。
「店の中は、結構暑いな」
「上着を脱ぎますか」
彼は周りの客を確認し、上着は着けたままにすることにした。
店内には年輩の2組と若い女性客のグループがいたが、誰もがきちんとした身なりをしていた。

「ところで優子は、どんなタイプの男性がいいんだい？」
デザートが出ると、彼が尋ねた。
「そうですね、寺尾さんは女性と歩くときに車道側を歩いてあげますか？」
「ケースバイケースだね、若い頃は必ずそうしていたよ」
彼女の言いたい事は、かつて彼自身が別の女性に言った言葉と同じものだった。
おそらく彼女も誰かとの会話に出て来たものを答えたのだと理解した。
彼は、恋愛を語る前に恋を語って見たかったが、彼女との仲では少し早いかなとも思った。

店内には、ドビュッシーの月の光が漂っていた。
この曲は、彼が唯一理解することの出来るクラシック音楽だった。
会話は途切れ、彼は彼女との世代のギャップを埋める努力をしないでいた。
自分にもそのような話題に夢中になっていた時代があったが、彼女との会話で展開することを忘れ、かつての情景を1人で思い出していた。
彼の心は、まるで湖水から立ち昇る靄が月の光に映し出されるように漂っていた。

彼は、彼女が席を離れた僅かな時間に、支払いを済ませておいた。
店を出ると、二人は池袋の駅へ向かって歩き始めた。

「いくらでしたか？ 私の分、払います」

「いいんだよ、二人の場合は奢ることにしてるんだ」

「じゃあ、明日もどこかへ行きましょうか」

「こらこら、なんてやつだ」

丸井スポーツ館の前まで来ると、赤信号に止められた。

「ところで、この前言っていた職場の宴会へは行きましたか？」

「いや、いつものようにパスしたよ」

「またですか」

「1次会からカラオケだって聞いていたからさ」

「そう言えば、寺尾さんの歌を聴いたことがないですね」

「そうかい」

彼はほんの少し考え込むと、言葉が続けた。

「じゃあ僕の腕を取ってごらん」

彼女が面白そうに右腕を絡ませると、信号が変わった。

彼は、横断歩道を渡りながら歌い始めた。

SPEAK LOW, DARLING SPEAK LOW
LOVE IS A SPARK, LOST IN THE DARK
TOO SOON, TOO SOON
I FEEL WHEREVER I GO

ラテン調のリズムが多い”SPEAK LOW”の2番歌詞を、彼はサラ・ボーンのパラード調で歌った。

恋を語るなら轟くようにと。

彼の意志を継ぐ

坂道を駆け上がってきた黒いオープン2シーターが、T字路の赤信号に減速し停止線の少し手前で止まった。

右側の助手席にはポータブルのMD再生機が置かれ、オーディオカセットの形状をしたコネクティングパックを介してカーオーディオへ接続されていた。

小型オープンカーにはCDチェンジャーが実用的でないのを彼女はよく知っていた。

SPからは、エネルギッシュなデクスターゴードンのサックスが流れていた。

信号が青になると彼女はゆっくりと左折し、次のガードレールの境目からマンションの敷地内へ入った。

横浜の市街でも紅葉が始まりそうなこの時期、街路の楓はまだうまく電線を隠し穏やかな住宅地らしさを醸しだしていた。

地上4階建ての低層マンションは、全戸の駐車場を地下へ設置し坂道の多いこの地域によく溶け込んでいた。

彼女は階段を使用してエントランスへ出た。

エレベーターホールの前に設置された郵便受けから、通販のカタログ雑誌とハガキ類を取り出した。

クラッチバッグを小脇に抱え、郵便物の差し出し人を確認しながらエレベーターを待った。

幾つかのダイレクトメールから宛先のシールを丁寧に剥がすとポケットへしまい、メールはエントランスへ備え付けられたゴミ箱へ廃棄した。

最上階でエレベーターを下りるとバッグからカードキーを取り出し、1mほど後退したドアフォンと兼用のリーダーに読み取らせた。

室内へ入ると、玄関に近いクローゼットとして使用している部屋で着替えを取り出し、浴室に備え付けの多目的棚へ置いた。

給湯栓を開き浴槽へ湯を出すと彼女はキッチンへまわった。

キッチンの壁に設置してある統合フォンのホームセキュリティが、留守に電話があったことをランプの点滅で知らせていた。

彼女は冷蔵庫から缶ビールを取り出すと、書斎として使用している約4畳のユーティリティールームへ入った。

そしてパソコンのモデムへ接続している留守番電話の再生ボタンを押した。

内容は所轄の警察署へ連絡が欲しいとのメッセージが、若い男性の声で録音されていた。

彼女はメッセージの相手先電話番号をメモに記録するとすぐにボタンを押した。

缶ビールにまわりついた滴がパソコンラックのテーブル上にたまり始めた。

事務的に対応する相手の用件は、交通事故で亡くなった男性の身元確認をやって欲しいとの依頼だった。

彼女はキッチンへ置いてあったバッグを取ると、浴室の湯を止め駐車場へと下りた。

彼女の黒いアルファスパイダーは、10分後には病院の駐車場へ乗り入れた。

小雨が霧のように漂っていた。

彼女は幌をかぶせるとドアをロックした。

正面玄関から中央に植木を並べた待合い室を通過し、電話で知らされた安置所へ直行した。

中には若い制服の警官と年輩の私服の男性が待っていた。

「よくいらっしゃいました」

年輩の男性の方が話し始めた。

「カミムラ・アキコさんですね」

「はい、ショウコと読みます」

「これは失礼、寺尾敏夫さんをご存知ですね」

「はい、友人です」

事務的な質問が続けられた。

「どのようなご関係でしょうか」

「ごく親しい友人です」

「そうですか、それは大変したね、お気持ちはお察しします」

「寺尾さんがどうなさったのでしょうか」

彼女は、安置されている彼らしい遺体と年輩の男性を見比べながら質問した。

「保土ヶ谷バイパスでの玉突事故です」

彼女は無言で次の説明を待った。

「後ろから大型が追突したので、彼の、えっとなんていったっけ」

若い警察官へ説明を求めた。

「ハッチバッククーペです」

「そうそう、そのクーペの上半分が吹き飛ばされて無くなりました、即死でした」

「そうですか」

彼女は納得するでもなく、頷いた。

「では確認していただけますか」

「はい」

彼女は返答したものの足が1歩も前へ出なかった。

「いや、もうすぐご家族が到着されるので、無理でしたら構いませんが」

彼女は周りを見回すと、遺体の側のベンチに彼のブリーフケースが置かれているのを確認した。

「彼の持ち物です」

「そうですか、あの小さなバッグの中にあつた住所録からこの病院に最も近いあなたに来ていただいたんですが」

「はい、ありがとうございます」

「では、我々は少し席を外しますので、よろしかったら・・・」

年輩の男性は遺体に両手を合わせてから出ていった。

15分近くが経過した。

彼女にとっては長くもあり短くもあつた。

その間に彼女は彼を見ることは出来なかった。

そのような弱い自分自身に納得できなかったが、彼が死んだことも実感としてなかった。少し破れてはいるが、ブリーフケースの側に彼愛用のカメラバッグもあつた。

よく見かけたものであった。

彼女のポートレートを撮影するときにも彼は担いできた。

彼女がそっと触れると、破れた隙間からプラスチック製のケースに入ったフィルムが1つ転がり落ちてきた。

ケースの蓋を開けるとフィルムはしっかりとパトローネへ巻き取られて、撮影済みであることがわかった。

フィルムケースは、全部で14本あった。

8本がISO400のスライド用カラーリバーサル、6本が同じくISO400のモノクロームフィルムだった。

彼女は彼がモノクロームを自宅で現像プリントし、カラーは現像所へ出していたのを思い出した。

全て彼から教わった知識だった。

彼女は彼の最後の行動を知りたい衝動に駆られて、黙って自分のバッグへしまった。

2人の男性は、まだ戻ってくる気配はなかった。

3日後、彼女は勤めからの帰りに、駅の側の夜遅くまで開いている写真店へ寄った。

秋雨前線で駅前のロータリーは黒く沈んでいた。

8本のカラーリバーサルからマウントされた、全部で290駒のスライドを受け取った。

「面白い写真を撮りますね」

店主が親しそうな表情で話しかけてきた。

「はい、兄から出しておいて欲しいと頼まれたもので」

「そうですか、お兄さんですか」

店主は頷くとサービスだと言って、ダイレクトプリントのお試し券をフィルムの本数に数枚たして渡してくれた。

「じゃあお兄さんに、プリントのときはまたよろしくとお伝え下さい」

彼女は頷くだけで店を出た。

急ぎ足でマンションへ帰ると彼女はパソコンデスクの上に8個の四角いケースを並べた。

そして少し後悔した。

スライドを観賞する写真用品を持っていなかったことにたいする焦りを覚えたことからだった。

とりあえず彼から習った方法を思い出し、スライドをデスクの電灯に透かして四角いケースに付いた小さなルーペで簡便的に見ることにした。

写真は昭子にとって衝撃的な内容だった。

8本全てに一人の女性のヌードが撮られていた。

主に外国ブランドの下着を着けているものが多かった。

彼女は時間をかけて全部を見終わるころ、被写体の女性の名前を思い出した。

彼と親しい友人だけの食事会に出席したときに、写真とは髪型は異なるが会っていた。

昭子は、システム手帳を取り出すと記憶の名前と一致することを確認した。

“霧島庸子”、彫りの深い美人だった。

翌日昭子は、旅行用のフィルムをまとめて買うときに以前敏夫から連れていってもらった横浜

駅に近いカメラ専門店のビルへ寄った。

1階のエレベーターの前には、各階の案内が書かれていた。

彼女はそれに従って地下へ下りた。

店員をつかまえるとスライドビューワの場所を尋ねた。

黒のベストを着けた胸の名札を読むような素振りで聞くと、各種ビューワを並べた場所まで案内してくれた。

そしてどのような方式が欲しいかと逆に尋ねた。

彼女は彼が使用していた背面からランプで照らすドイツ製の小型ビューワの特徴を答えた。

店員は彼女の説明だけで、同一のものを取り出してくれた。

そして電源として1階の売場で乾電池を買うように助言してくれた。

昭子は、毎夜彼のスライドを観賞した。

そして彼が何を撮りたかったかを想像したが、霧島庸子のヌードからはそこまでわからなかった。

庸子に比較して、自分はまだポートレートしか撮影してもらったことがない。

それだけは、はっきりしていた。

手元にはまだ6本のモノクロームフィルムが未現像で残っている。

しかしこれは写真店には出したくなかった。

彼は必ず自分で現像すると言っていた。

ましてやカラーは全て霧島庸子のヌードだ。

モノクロームには何が写っているのか不安をかきたてられた。

敏夫の49日が過ぎた休日の午後、昭子は彼の実家へ寄った。

アルファスパイダーで訪れると、珍しい車のせいか彼の両親は何度か訪れた彼女のことを憶えていてくれた。

座敷の仏前で線香をあげてから事故の様子を尋ねた。

両親は居眠り運転をした大型の運転手がブレーキが間に合わずに突っ込んだ警察の説明を、そのまま彼女に話してくれた。

「そうそう昭子さん、あなたは敏夫が勤めていた電気会社にいましたよね」

「はい、設計をやっていた敏夫さんとは部署は違いますが」

「だったら敏夫が事故に巻き込まれた日に持っていたビデオテープをうつしてくれませんか、ダビングとか言うらしいが」

彼の父親の頼みだった。

そして敏夫の使用していた部屋から3本の小さなビデオテープを持って来た。

「わしにはわからんのだが、どうもVHSとは違うらしい」

彼女にはすぐに8mmビデオテープだとわかった。

「わかりましたこれはHi-8と呼ばれるムービーで撮影されたテープです、お借りできればVHSへコピーしてきますわ」

「わるいなあ、線香をあげに来てもらったのに用事を頼んだりして」

「いえ何かのお役に立ちたいと思います」

両親は門から道路へ出て、見送ってくれた。

そしてくれぐれも事故には注意するようにと付け加えた。

昭子は、翌日会社からHi-8を再生できるビデオデッキを借り出した。

そして書斎のVHSビデオデッキへ接続するとコピーを始めた。

パソコンと兼用のモニターには、敏夫と庸子の撮影現場が映し出された。

勿論2人の会話も全てわかった。

彼女はコピーを途中でやめると、両親への説明を考えるのに苦慮した。

このまま渡すわけにはいかない。

そこで昨年と同じ時期に友人数人と旅行に出かけたテープから昭子が出てくる場面を巧妙にカットしたテープを1本作成することにした。

そして敏夫の8mmテープは自分が保管することに決心した。

翌日昭子は敏夫の両親へ先日の訪問のお礼とともに、テープがコピーできたので送る旨の手紙を入れて、偽のVHSテープをユウパックで送った。

コピー元のオリジナルテープは、敏夫にすら見せていなかったので安心して送ることができた。

手紙には元の8mmテープを貸しておいてくださいと書き添えておいた。

その日から彼女は時間をかけて3本のテープを見た。

テープの内容は、敏夫と庸子の撮影風景を撮影したものだった。

特にビデオ用のライティングに凝るわけでもなく、むしろ淡々と記録されたものだ。

そしてモノクロームのフィルムには、一般の写真屋へは出せない過激な裸体が写されていることを、そのテープから確認できた。

彼は霧島庸子のヌードの撮影方法として、まずしっかりと下着を着けた正当的なポーズをカラーで撮り、続けて下着を外したポーズをモノクロームで撮影していた。

カメラはニコンF4とF3を使い分けていた。

天窓から差し込む太陽光に女性自身を曝したもの。

適正露出は顔にあるので、その部分は白くとんでいるだろうと彼女にも想像できた。

また、ときにはさらけ出した女性自身をクローズアップレンズで撮影している場面もあった。

そのときの2人の会話は、不思議な内容に満ちていた。

彼は自ら下着の脱着も手伝い、カメラマンとモデルの関係を乗り越えていた。

でも男性の恋人が撮る遊びのヌードでもなかった。

自分と敏夫との間にはなかった不思議な関係だった。

庸子に対する嫉妬心に、僅かだが憧れが混在していた。

3カ月後、昭子はオートフォーカスの中級一眼レフを購入すると、ごく普通のネガカラーフィルムで試してみた。

風景やスナップショットでは、マルチパターン自動露出もフォーカス精度も満足出来るレベルにあった。

次に敏夫が使用していた銘柄と同じモノクロームの撮影を試みた。

その中から1本を写真店へ現像に出し、仕上がりのリファレンスとするべく保管した。

続けて10本近い撮影を済ませると、いよいよ自分で現像にチャレンジするべくまた用品を買い出しに出かけた。

以前ビューワを購入したカメラ店へ寄ると、同じく地下の売場へ行き先日の店員を捜して用品を揃えた。

店員は昭子を憶えていなかったが、数日間続けて通ううちに親しくなりいろいろと助言をもらえるようになった。

彼女は敏夫と同じ用具を最初に揃えようと思ったが、頻繁に実家を訪れるわけにいかずこの助言にはずいぶんと助けられた。

彼女の書斎からはパソコンが一時的に片付けられ、写真関連の用品で占領されていった。

10本の現像をこなした頃、ようやくハウツー本に書かれた要領がのみこめ失敗無く仕上がるようになった。

彼女は、いよいよ敏夫のフィルムを現像することにした。

少し使い慣れてきたステンレスタンクのリールへ、ダークバッグを用いて未現像のフィルムを巻き付ける。

次に1体1に希釈した20度の現像液を入れ、本に書かれた通りに分単位で攪拌する。

所定の時間を経過したら躊躇わず排出し停止液を注入。

攪拌後に水洗。

そして15分の定着。

ここで始めて撮影済みのフィルムは明るい部屋の中で見ることが出来る。

しかし彼女は焦らずに1時間近い水洗を行い、クリップで書斎の鴨居に渡したロープに吊した。まだ自然乾燥が終わらないうちからネガを確認した。

ビデオテープから想像していた内容ではあったが、淫靡なポーズが続いていた。

明日はビデオカメラの先端に取り付けて、ネガフィルムをポジに反転して録画するアクセサリーを買いに行くことにした。

1本を現像するのに1日を要した。

用具が1式しかないせいもあったが、失敗を許されないという彼女の気構えもあった。

全ての現像を終了すると、彼女は用具一式を片付けてビデオ機器をメインに書斎の中を配置替えした。

3本の8mmテープを参考に、カラー、モノクロ計14本の504コマを時間の流れにそってインデックスを作り全コマを並べてみた。

それだけで土日の休みを費やした。

そして1コマ5秒間のインターバルで、1本のS-VHSビデオテープへ全てのコマを録画した。

彼が撮影した霧島庸子の写真集が、昭子の努力でビデオテープとして完成した。

敏夫なら必要なコマを選択し、うまく写真集風につくるに違いないと思った。

でもビデオ編集なら自分の仕事から敏夫と同等以上の編集が可能だと彼女は思った。

彼女は敏夫が退職した後も電気メーカーに残り、営業支援の仕事が続けていた。

そこで彼女が独自に選択したフレームを別のS-VHSテープへ編集してみた。

約1週間後には、カラーのコマを多用した綺麗なポーズのテープと、モノクロームを多用した淫靡なポーズの全く異なる作風のテープが出来上がった。

「表と裏か」

出来上がったラッシュのような作品を観ながら、彼女は独り言のように呟いた。

季節が経過し、敏夫の命日が近くなった。
出来上がった2本の写真集とも言えるテープは、昭子の書斎の本棚に収納されていた。
彼女は何か足りないと思いつけていた。
編集作業以降疲れが先に出て、8mmテープを見ることもなくなっていた。

その日、昭子は元町商店街の終点に近いウチキパンでばったりと霧島庸子に出会った。
「あら、こんにちは」
声をかけてきたのは庸子の方だった。
「お忘れかしら？」
美人が下から覗き込むように尋ねてくると、昭子は同姓ながらどぎまぎした。
「いえ、霧島さんお久しぶりですね」
昭子は気を取り直して元気そうに応えた。
「やっぱり憶えていてくれたのね、嬉しいわ」
「敏夫さんの紹介ですから」
「そうだったわね、こんな再開をして彼いまごろ天国で笑っているかしら」
庸子はそう言うのと涼しそうな目で微笑んだ。
彼女のアイシャドウは、ブラウンから淡いゴールドへ丁寧に仕上げられていた。
彼が好みそうな艶っぽさだと昭子は思った。
「霧島さんはここのパンを好きなんですか？」
「ええ、食パンも有名だけど敏夫さんがここのフランスパンも好きだったの」
昭子はほんの少し嫉妬を覚えた。
そして唐突に写真の話題を切り出した。
「彼の撮ったあなたの写真を見ました」
「あらそう、ヌードかしら、それとも紅葉をバックのポートレートかしら」
彼女の声で、店内の客が数人怪訝そうな顔をして2人を見た。
「お話しがありますので、どこかでお茶にしませんか」
「そうね、じゃあ風雅亭でランチでもどう？」
庸子の方が先に店を指定した。
風雅亭は昭子も利用したことがあった。
店へ入ると、2人とも月代わりのメニューになったランチを注文した。
「ここで出すパンもウチキパンだったわね」
最初に庸子が話しを始めた。
「ええ」
「ところで私の写真って？」
「敏夫さんが亡くなったときに未現像で持っていたものです」
「じゃああなたが、それともご両親が」
「はい、私がカラーを写真店で、そして・・・」
「白黒もあったわね」
モデルとして見せた淫靡さを微塵も感じさせず、相変らず彫りの深い美しい表情で尋ねた。
「私が現像しました」
「へえとても素敵じゃない、敏夫さんから教わったの」

「いえ、自分で勉強しました」

「じゃあフィルムを見つけて、敏夫さんのために努力したのね」

「それもあります」

「あら、他にも理由があって？」

庸子の口許が関心を示すように僅かだが引き締められた。

海鮮のオードブルが運ばれてきた。

2人はフォークをとることもなく、見つめあっていた。

「敏夫さんが撮影していたビデオテープも見たんです」

庸子がバッグから革製のシガレットケースを取り出すと、店のマッチで煙草に火をつけた。

一息吸い込んでからゆっくり吐き出すように話した。

「いつも撮影場所を流し撮りしていたビデオね」

「そうなんです」

このような写真撮影が、あのときだけではないことが庸子の返答からわかった。

昭子はこれまでの経緯を、かい摘んで霧島庸子へ話して聞かせた。

「じゃあ今のあなたの悩みは、写真集が完成しないことね」

「そうとも言えます」

「私は頑張ると応援するしかないわね」

彼女は美しさをたたえたまま、さらに困ったような表情をしてみせた。

「出来上がったら私にもくださるかしら」

「写真集としてのテープですか」

「そうよ」

その返答には庸子の確固たる意思が存在していた。

「ではもう少しお待ちください、なんとかしてみます」

「今度いっしょに遊びに行かないこと、私って強くなろうとするあなたのような女性は好きよ」

庸子の次の話題は、既に別のものに移っていった。

昭子は、その夜久しぶりに敏夫の8mmテープを最初から最後までとおして見た。撮影データの収集として確認したときと異なり、2カ所で気になる場面を発見した。今までは編集に没頭して内容まで考えていないところだった。

先ず、敏夫が庸子のアンダーヘアをカットしている場面だった。庸子のヘアは、少し上向きに跳ね返っていた。

そこで敏夫は余分な部分をハサミでカットし、ヘアクリームでセットしていた。

二人の会話では、ムースよりうまく仕上がるはずだと言っていた。

続けて大きなテーブルの上で四つん這いになった庸子の背後から、敏夫は彼女の女性自身を広げて撮影用に固定していた。

庸子の、これ以上はない全てが映し出されていた。

ビデオカメラの位置からは、二人の表情は見えない。

庸子のポーズは、テーブルにかけられたグリーンメタリッククロスの上で妖しく冴えていた。

そこでほんの一瞬、敏夫は庸子の女性自身へキスをしていた。

この動きでは、庸子は気付いていないと昭子は確信した。

なにしろその前の彼の行為は、大陰唇を指で押し広げることで庸子は彼の指としか錯覚しないは

ずであったろう。

また2人の関係にSEXが介在しないことも、テープの会話から確信していた。

昭子はこの一瞬をなんと理解してよいか、逆に悩むことになった。

次に3本のテープの終了間際に、敏夫は写真集の表紙になるショットを残しておきたいと発言していた。

モデルの庸子は既に疲れていて、その意見には同意していなかった。

テープから敏夫の唯一のかげりが伺える部分だった。

そのあと外のバルコニーで、ごく普通の服装をした庸子のポートレートが数ショット撮られている。

ビデオにはない部分である。

すでにビデオカメラは、片付けられた後なのであろうと昭子は思った。

彼女は、そのポートレートのプリントをデスクに並べてみた。

サイズはR P - L Lだった。

ポートレートは、彼が撮ったと確実にわかる作品だ。

バストショットの場合、背景の木々のボケには必ず木漏れ日を入れていた。

これらのショットは表の写真集の表紙に使える。

表紙にはこのように、敏夫さんを間接的に登場させなくてはならないはずだと昭子は思った。

彼女の気持ちは女性としてではなく、男性つまり敏夫としてものごとを考えていた。

すると裏の表紙は。

そうだ、登場するのはやはり庸子だが彼がキスした痕跡だ。

でもいくら裏でも大陰唇を表紙には使えない。

昭子の推測はそこで一時停止した。

1週間後のまだ早い夜、昭子は庸子に電話してみることにした。

「今晚は霧島さん」

「あら昭子ちゃんじゃないかしら、お元気？」

「はい、先日はどうも」

「私はお風呂から出て、ワインをいただいていたところ」

「あれから考えたんですけど表紙が今一つわからないんです」

「そう、こまったわねえ」

夜の庸子の口調はまとわりつく雰囲気が増加していた。

逆に直接会ったときに受けた視覚的に聡明な美人度は薄められていた。

「唐突ですが、庸子さんは敏夫さんとキスしたことがありますか」

数秒間の間があいた。

「彼とは長いけど、よく考えてみるとないわね」

「そうですか、残念です」

「あら、あった方がよかったのかしら」

庸子はからかうように言った。

「でもね、一度敏夫さんからキスした後の写真を撮りたいと言われたことがあったわ」

「キスが目的じゃあないのですね」

「そうよ、撮影の帰りの車の中だったわ」
「どんなシチュエーションでしょうか」
「なんて言うのかしら、グランドホテル形式とか言うのかしら」
「幾つかの物語が同時進行する映画ですか」
「そうそう、あれの新しい映画で日本人のカップルがアメリカで過ごす何日かが出てくる・・・」
「わかったミステリートレインだわ」
「正解よ、そのビデオを見せてもらったことがあるの彼に」
「とすると、あのシーンだわ」
「参考になったかしら」
「はい」
「じゃあ、おやすみなさい」
「ちょっと待ってください、今度、いえ今月中に私と旅行に行きませんか」
「あらあなたから誘ってくださるの、嬉しいわ」
「彼の意志を継ぐために、最後の撮影をしたいんです」
「じゃあキスの後のシーンをあなたが撮るのね、黒いアルファで迎えに来てね」
「はい、彼があなたの女性自身へしたように、私はあなたの口にします」
「おや過激なこと」
「実はそのような敏夫さんの行為が、ビデオにあったのです」
「へえあの日にかしら、知らなかった」
「ミステリートレインがキーだとすると、私は庸子さんに強く深いキスをして・・・」
「唇の周りがルージュで真っ赤に汚れるのね」
「いえ、素敵に汚れるのです」
しばらく間があった。
「きっと、私は泣くわ」
「是非泣いてください」
「そう言っていただけだと嬉しい、彼と銀座で買ったL O R A Cのルージュにパールを入れてみようかしら」

二人で彼の意志を継ぐキスをする。
昭子はその後で、一滴の涙を流す庸子の表情を想像できた。
亡くなった彼に対する庸子の憂いが含まれた、とても美しい表紙が撮れるだろうと確信した。
そしてそれは彼の遺作として、最も相応しいだろうと思った。